

平成 16 年度緊急雇用特別補助金活用事業

事業名：地域資源・地域文化調査活用事業

報告書

委託者：今立町

受託者：NPO法人 森のエネルギーフォーラム

平成 17 年 3 月 30 日提出

目 次

1 . 全体のアウトライン

2 . 今立地域資源・地域文化調査の課題と方法

杉村和彦(福井県立大学学術教養センター教授)

3 . 報告1：受けての日常生活からみたグリーン・ツーリズムの可能性

調査・研究員 石山俊

4 . 報告2：今立地域資源調査研究報告書

調査・研究員 福嶋輝彦

5 . 報告3：地域資源の情報発信の方法、及び今立の地域資源発信ターゲットとしての若年層、特にスロー/クラフト系クラスタについての調査レポート

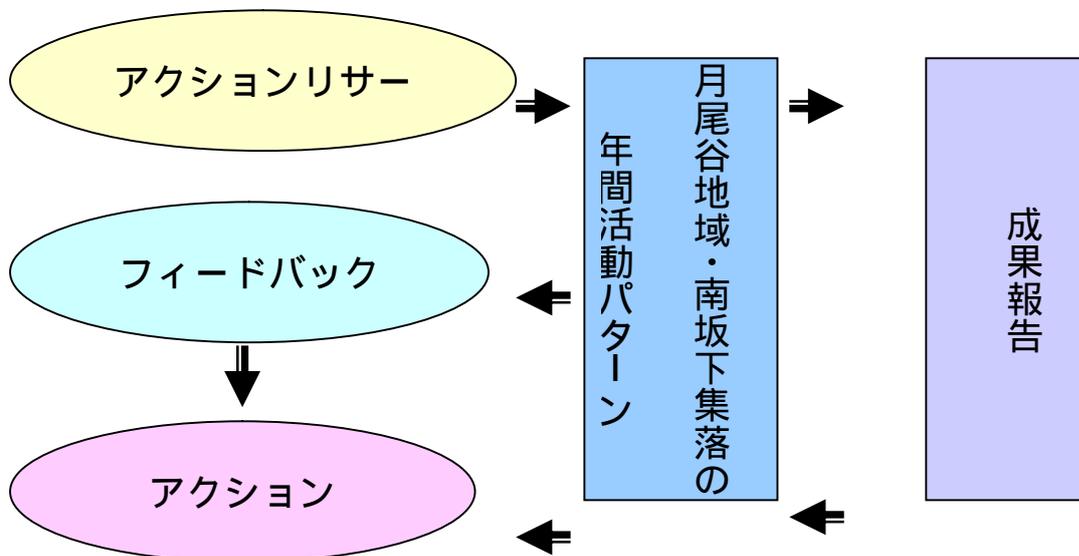
調査・研究員 淵上周平

事業名：地域資源・地域文化調査活用事業概要

月尾谷地区の地域資源・地域文化調査・活用

NPO森のエネルギーフォーラムが今立町からの委託を受け、地元学の視点と手法で地域資源・地域文化を活用したパートナーシップを構築することを主な調査成果として報告する。

1. 地域にある自然資源（素材）と人間への働きかけ・時の蓄積から生まれた文化を体験する。
2. 四季の自然と歳時記をデータアーカイブとしてまとめる。
3. 和紙体験・織物体験・陶芸体験・農業体験・林業体験・食体験（衣食住体験）のメニュー出し。
4. 四季の里山の自然のなかでの遊び・学びの体験
5. 四季の寒暖に対応した生活の中で自然のエネルギー体験
6. 建築・庭様式文化体験
7. すでにある豊かな人材・フィールド・経験・施設機能・ネットワーク
8. 起業の可能性について検証
9. 豊かな自然・社会・文化資源を現代人の新しい生き方の模索に対応した、洗練された提案の仕方を研究。



ハツ杉森林学習センターから

ねらい・位置付けとして要望事項

今立町（月尾地区を中心に）に固有な資源・文化の発掘&現代的活用 「子どもアートセミナー」や「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」に発展

ハツ杉森林学習センターの学術・調査事業 福井県立大学「モラル・エコノミー研究会」や「産直研究会日本集会」と協働

ハツ杉森林学習センターのソフト充実・施設利用促進事業 「子どもアートセミナー」や「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」に発展

20世紀後半の地域の変化・特に人口流出・産業の変化を統計的手法で解明

都市部への人口流出・とくに団塊の世代の意識調査 「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」へ発展

21世紀前半のシミュレーション 「産直研究会日本集会」や「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」でシミュレーションし可能性を探る

レンヌ大学・東京大学「産直研究会日本集会」産直研究会 第一回日本集会

日時 2004年12月20日（月曜日）午後2時から6時まで

場所 東京大学 本郷校舎 社会科学研究所 一階・大会議室

文京区本郷7-3-1 電話 03 5841 4976（加瀬）

議題 日仏産直研究プロジェクトの概要とフランスグループの研究活動の説明 雨宮裕子
ブルターニュ地方の農業と環境問題、産直、フェアートレード、食教育 雨宮裕子/Marc Humbert

日本の各研究グループの取り組み課題と進め方

1. 加瀬和俊、田端博邦（東大社研）
2. 嶋田義仁、村松研二郎（名古屋大）
3. 薬師院仁志（帝塚山学院大）
4. 雨宮正子、高橋清、矢吹紀人（千葉県自治体問題研究所、多古旬の味産直センター）
5. 杉村和彦、増田頼保（福井県立大、NPO 森のフォーラム）

共同研究の進め方、国際会議、相互視察、報告集

作成の年間プラン確認

日仏産直研究プロジェクト コーディネーター、レンヌ第二大学社会・人類学研究室附属日本文化研究センター所長 雨宮裕子

地元学の視点と手法から生活基盤としての地域資源の質的・量的把握

水・食糧（農産物・山菜・木の芽・木の実など）建築・繊維資源 「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」へ発展

その基盤としての森林・田畑 「今立エコ・グリーン・ツーリズム協議会」に展開・発展
エネルギー（バイオマス・風力・水力） 「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」へ発展

社会資源 住居の再利用・地域固有の建築様式・素材 「今立 古民家・匠・ロングステイブ
プロジェクト」へ発展

空き家調査

現代的市場開拓・その手法 「今立 古民家・匠・ロングステイブプロジェクト」へ発展

文化資源 季節の変化(寒暖)に対応した食文化・生活様式 「子どもアートセミナー」や「今
立 古民家・匠・ロングステイブプロジェクト」へ発展

U・I・Jターン・グリーン・ツーリズム・ラーバニズム・ふるさと回帰などの社会的潮流に対
応したソフト開発 「今立エコ・グリーン・ツーリズム協議会」や「今立 古民家・匠・ロ
ングステイブプロジェクト」へ展開・発展

石山研究員のアウトライン

1. 東京育ちの青年に田舎の暮らしを体験してもらい、その感想などを記述する。
2. アクションリサーチという手法で、地域資源・地域文化の調査を実施。 方法論として
3. 特に南坂下地区における、年間通しての歳時記を記述。歳時記 生活カレンダー
4. そこに住んでみることで得られる人間関係を大切にしながら、地域の風習、しきたり、約束事、村の仕組み、農業体験などを調査して、今立における田舎暮らしがどのようなものをまとめる。

「村の仕組み」ではなく、ムラ(区)の社会組織のまとめ、をふまえながらグリーン・ツーリズムの可能性について提言

福嶋調査員のアウトライン

1. 4月5月で今立の調査を行い
2. アクションプランとして、6月今立PJとアートセミナーのプランニング
3. 実践：農家でのコンサート、今立古民家・匠・ロングステイPJ及び子どもアートセミナー
4. その過程から浮かびあがるハツ杉の利用形態と今立の問題点を導く

淵上調査員のアウトライン

1. 地域資源の情報発信の方法

紙媒体を活用した地域情報の発信

事例紹介：G-NET

2. インターネットを活用した地域情報の発信の内容と方法について

地域情報発信ウェブサイトにおける問題点

ウェブログ(ブログ)による情報発信

事例紹介：e コミュニティしまだ

ソーシャルネットワーク(SNS)による情報発信

事例紹介：ソーシャル・ネットワーキングサイト[ミクシィ]

その他の可能性：コミュニティ通貨

3. スロー/クラフト系クラスターの関心内容と今立地域資源との接続可能性

スロー系、及びクラフト系ターゲット層について

ユーザーインタビュー(20-30代、及び団塊の世代)

媒体分析

今立町地域資源・地域文化調査の課題と方法

杉村和彦（福井県立大学学術教養センター教授）

1. はじめに

1) 一周遅れの最先端

今日、日本国内における中山間地の過疎化状況の中には、過疎の「奥地化」というような状況が一般的に見られ、耕作放棄地や空き家となった民家などがその地域に広がっている。しかし1990年代以降、グリーン・ツーリズムなどを通じた都市住民の農村志向、さらにIターンやJターンに見られる離都向村という現象は、環境教育や帰農者の受け皿として、こうした地区の地域資源、地域文化の新たな価値の発見と評価を生み出してきた。

こうした地域資源価値の転換をもっとも明瞭に示すものの一つが、以下のような世界遺産に登録された白神山地のブナの原生林とそこに生活する住民の世界であろう。高度経済成長期に他の諸地域の豊かなブナ林はつぎつぎに伐採されて行ったが、その中で最も開発の遅れた地域の一つである、青森県の白神山地には大規模なブナ林が残されたのである。

掛谷はこのような状況を陸上競技用のトラックを走る長距離ランナーにたとえて、青森県は「一周遅れの最先端」の位置に立ったと表現することが出来ると述べている。すなわちそこでは「経済開発に遅れをとったがゆえに、貴重な自然資源の保存については最先端の位置に躍り出たのである。」（掛谷1990）

今日中山間地の過疎地の中で再発見され、新たな資源価値が付与されつつある現象の中には、こうした「一周遅れの最先端」というべきことがらを様々なかたちで見出すことができる。例えば耕作放棄地や空き家となった古民家が卓越する地域こそは、通常もっとも過疎状況の進んだ遅れた地域と考えることが出来るだろう。しかし長期滞在型のグリーン・ツーリズムを存分に楽しもうとする都市住民にとっては、そうした地域こそ最も豊かな地域資源を有する場所だと考えることが出来る。

このように一周遅れの最先端としての中山間地の地域資源は、しばしば都市民の新たな価値資源評価との関係で、これまでの地域資源評価を逆転させ、農村間の資源価値の豊かさをはかる尺度をも変換して行っているのである。

2) 調査方法

本研究においては、研究対象地域である、福井県今立町のなかでも山間部の農業不利地域である一つの集落に焦点を当て、グリーン・ツーリズムを基調とした都市と農村の結合の下での地域資源・文化資源の再評価に関する調査を行っている。

本調査研究の対象である今立町の中でも、町を中心から離れた地域では過疎化が深刻であり、耕作放棄地や空き家となった古民家が点在している。こうした中で本調査研究を今立町から受託したNPO法人森のエネルギーフォーラムが調査研究のための活動拠点として選択した地域も町のはずれにある南坂下地区であり、そこで田畑を借り受けてアクションリサーチを続けるとともに、その地区の古民家を借り受け、グリーン・ツーリズムにかかる活動を開始した。それと同時に、その活動から派生したものとして、NPO法人森のエネルギーフォーラムを母体とした福井県の地域ブランド推進事業のひとつである今立古民家・匠・ロングステイプロジェクトが、この古民家をNPO法人森のエネルギーフォーラムから借り受けるかたちで事業を開始することになった。

こうした様々なアクションの中で、地域資源が新たな価値付与をされていく過程をこの地域調査の研究者は、文字通り参与観察者とし、調査研究に当たってきた。

今立町の調査対象地区の里山には、県内でも先導的な環境教育施設として、八ツ杉森林学習センターが建てられ、多くのエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムの顧客を吸引し、こうした動きのさきがけとなってきたが、調査拠点集落としてなった南坂下地区はこの学習センターにもっとも近いところにある。

また本研究においては、住民参加型の「地元学」という視角を重視し、八ツ杉森林学習センターのスタッフ、環境NPO、町の産業振興課、集落住民の中の協力者とともに調査に当たる方法を取るとともに、グリーン・ツーリズムという大きな変動要因を主題化するため、都市の住民の今立町に対するイメージや農村志向の意識調査にも大きな力点をおいた構想を持って研究活動を出発させた。

2. 今立町の地域資源・地域文化を現代にコーディネートする

1) 新たな資源価値の発掘の媒介者

(1) 地域資源をとらえなおす現代的視角

本調査の中では、今立町の地域資源・地域文化をその歴史に内在して検討する中で、生きられた文化伝統として取り出すという試みを行っている。そのために、調査員の一人、石山は、南坂下地区に調査拠点を設け、長期滞在型・参加型のフィールドワークを行い、伝統行事や慣行についての深い調査も試みてきた。

しかし今日、今立町の地域資源・地域文化を掘り起こすという作業は、いうまでもなく、かつての民俗調査の中に見られたように、現代社会の中で見捨てられ、失われたものを惜しみ、「保存する」と

いうところにあるわけではない。歴史文化伝統としての詳細な記録作業が不可欠のものであるとしても、同時に現代社会の中でその価値を読み替え、現代社会と伝統的文化価値をコミュニケーションさせ、相互の融合を図る媒介者としての機能を調査者が担っていくことが、求められているといえるだろう。

本調査においては都市出身者あるいは、福井県出身の東京在住者によって行われ、調査過程そのものが、今立のような農村の地域資源、文化資源価値を志向するものによって行われるという意味において、グリーン・ツーリズムの長期滞在者、リピーターの立場に身を置いて、調査活動を行うという実験的なものになっている。この点で、今立町にこれまで眠っていた潜在的な資源価値を現代に顕在化させるという側面が、この調査過程そのものをアクションリサーチとして極めてユニークなものに仕立て上げているといえるだろう。

そして一年間の調査活動を結果としてみても、調査活動を委託した NPO 法人森のエネルギーフォーラムを母体として生まれたものとして、福井県のブランド推進事業の一つとしての今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトが進行中であり、またこのプロジェクト自身が、一つのアクションリサーチとしての意味を担うことになった。

今立町の地域資源や地域文化の真の現代的価値の発見は、少数の研究者の調査や規格化した観光事業によって流入するマスとしての観光者によって掘り起こされるものではない。むしろグリーン・ツーリズムなどに参加して、繰り返し、今立町を訪れ、今立町の真のファンクラブの一員として提言してくれる人からもたらされる可能性は大きい。

このような意味において、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの遊作塾の企画は、少数の参加者との密度の濃いコミュニケーションを前提とした一つのグリーン・ツーリズムを展開し、それを通して古民家や和紙技術に造詣の深い人々が参画してきており、地域資源の新たな価値付与、掘り起こしのための重要な情報提供者あるいは人材として、それ自身が資源価値を有しているともいえるだろう。このような意味で、今立町の地域資源・地域文化を掘り起こす担い手としては、このようなリピーターとしてのグリーン・ツーリズムの参加者も現代的な一つの地域資源・地域文化として一つの〈資源価値〉を認識していくことが重要になっているといえよう。

(2) 広範なネットワーク的信息と地域資源の読み換え

それと同時に現代の地域資源の読み替えの動きは急速なインターネットなどの情報機器の発達と即応しながら展開している側面も大きい。一地方の地域的情報であってもそれが真に価値あるものならば、それが即全国的、さらには世界的な価値を受けるものとして展開する。今立町の地域資源・文化資源の価値評価と現代的な読み替えの作業も、こうした広範な匿名的情報の担い手によって読み込まれ、新たな展開の可能性を持つ側面も極めて大きい。

本調査研究においては、こうした地域資源・地域文化の優れて現代的な状況を主題化し、その中で今立町の地域の固有状況を確定していく諸条件についても、研究活動の多くを費やすことになった。

研究員の淵上はこうした地域資源をめぐるインターネットのネットワーク分析を専門的に手がけており、とくに外部者による地域資源の読み込みだけでなく、地域内部で流通する情報ネットワークの立ち上げの可能性についても検討している。これらは、実際に地域研究のための地域の生活者がアクセスできる媒体を立ち上げ、まさにアクションリサーチとして、研究過程が展開できれば、極めて興味深い経験となったが、今回の研究活動においては、今後の提案的問題の提示に留まることになった。

地域調査は、確かに情報収集者の調査者が、その調査過程をリードすることになるが、地域社会の深い事実にもとづいてその可能性を図ろうとするならば、地域住民自身が、むしろ調査者として参画していく過程が必要であり、しかもこうした過程が加わるならば、情報量は、質的にも、量的にも一気に高まる。こうした時に、地域住民が簡単に調査活動に参画できる仕組みとして、情報ネット上のアクセスする媒体があれば、様々な新たな資源調査の可能性が開けたかもしれない。

また福嶋は、アクションリサーチの幅を広げるべく、NPO 森のエネルギーフォーラムの活動の一つとしての子供アートセミナーを主宰し、地域資源の可能性を、子供の目を通してとらえるという方法も提示している。このようにこの調査研究活動では、今立町における地域資源の現代的な可能性を様々なアクションを通してとらえなおすということを展開してきたが、調査活動の深化という点から見ると、アクションという方に力点がかけられ過ぎて、アクションに対する住民や子供の対応とそれによる、地域資源調査の深まりという点までは必ずしもいたらなかった。

2) 地域資源・文化資源を発掘する地域内部の起業者

(1) 地域資源の「発見者」という人的資源

今立町の地域資源・文化資源を現代にふさわしいかたちでコーディネートするためには、地域の外部者の価値の「発見」ということに留まるならば、そこからは何も生み出されてはいかない。間違えると地域に住む人にとってはむしろ迷惑な、勝手な資源価値の読み替えという事態が起こることもあるだろう。それゆえ、重要なことは、発見される新たな価値の中で、外部者と地域内部に住みぬく人の間に対話が生まれ、相互の間で、新たな資源価値の創造をめぐって協働の過程が生み出されていくことであり、その過程の中にこそ21世紀の中で今立町の地域資源・文化資源が真に価値付けられ、生かされていく道が開かれることになる。

そのためにまず第一に必要なとされる事柄は、地域の生活者内部に地域資源・地域文化の新たな価値発見者となる起業者が生まれ、新たな価値創造のための担い手になっていくことである。今立町の中には、人間国宝をはじめ、伝統的技術の継承者としての文化伝統の担い手は他の地域社会と比較するとかかなり潤沢な人的資源を抱えているといえる。

しかし今日、都市住民の田舎志向や、グリーン・ツーリズムが展開する中でより重要な事柄は、こうした地域社会の基層にある伝統的価値の担い手と外部者をつなぐ媒介者としての「起業者」である。

この点から見ると、今立町の地域資源・文化資源は必ずしも現代社会にうまくコーディネートし

ているとは言いがたい点が存在している。確かにこれまでも今立町には、八ツ杉森林学習センターの試みや今立町の産業振興課による今立 東京物語の企画など積極的に地域内部から現代社会と地域資源・地域文化をコーディネートさせようという試みが存在してきた。

また今年度福井県の県のブランド推進事業として今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトに参画している今立町内の住民の方々の活動の中にもこうした地域内部から起業者として萌芽的なかたちを見て取ることが出来る。しかしながら全体としては、こうした内部からの「起業者」としての動きは少数の事例に留まっており、今後の課題として、こうした新たな「地域資源」「文化資源」の価値創造の担い手としての「人材」を開発し、育てなければならない状況があるといってもいいだろう。

(2) 媒介者としての NPO の役割

こうした中で、今回の地域資源・地域文化の調査の受託者となった NPO 法人森のエネルギーフォーラムとその研究員の調査活動は以下のような点から今立町地域資源・地域文化を現代社会にコーディネートするための一つの重要な役割を果たすものになっているといえるだろう。

一つは今立町の内部に生活するこうした「地域資源」起こしの担い手となりうる、点としての「起業者」をつなぎ、一つの「起業者」間のネットワークを構築する媒介を促してきたことである。今立町の中にも農村の現代化を意識しながら都市住民との新たな交流を展開しようという人はたくさんおり、その「起業者」としての潜在的な能力、人材としての人的資源価値を有する人は多い。

しかしそのままでは顕在することのないこうした人材が、今回の資源調査から派生的に展開していた県のブランド推進事業、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの中で、少しずつではあるが、ゆるやかなネットワークを作る可能性ももってきたといえるだろう。

一方、今回の調査を担った NPO 森のエネルギーフォーラムが有する可能性は、NPO 内部に今立町の地域住民と地域外部（福井市、京都、大阪、東京）などの会員が存在し、フォーラムのメンバー内部に都市 農村の住民間の相互の対話を可能にする実験の場を有していることである。こうした点は、地域と地域外部を明瞭に区分し、事業展開をせざるを得ない行政の事業と比較する時、NPO が調査活動を担うことのメリットである。

今回、県のブランド推進事業が急展開したのにもかかわらず、比較的短期間の中に地域の伝統的資源と都市住民のニーズを融合する優れた企画を矢継ぎ早に生み出すことが可能になった源泉の一つもこうしたところにあるといえることができるだろう。

もちろん地域資源、文化資源のとらえ直しとその現代的コーディネートの作業はこうした NPO の仕事を充実していけばことたれりとなるわけではない。むしろ今立町での今後のこうした事業の推進の可能性を考えるためには、今回の NPO に対する調査の可能性と限界を見極めておく必要があるだろう。

その可能性としてはすでに述べたように、行政的な調査活動と比較する時、人材としての個々人に柔軟な直接的、重層的、テーマ別のアプローチが可能であり、調査過程そのものが、人材の発掘過程につながっていく可能性を含みこんでいることである。今日、現代農村地域社会においては、集落やイエというような伝統的な社会単位だけでなく、現代社会と向き合う個々の能力や可能性を前提においた地域づくり、その中での地域資源・文化資源の再発見の作業が必要になってこよう。こうした点で、NPO 的な柔軟なネットワーク組織が今後、今立町の新たな可能性を探り当てる可能性は大きいといえるだろう。

もう一つの特色は、こうした柔軟な NPO 的枠組みを生かして、地域資源の掘り起こしのための、問題提示型、仮説提示型のアイデアづくりの可能性が開かれていくことだろう。柔軟な NPO 的枠組みを十分に生かすことが出来るならば、短期間に、広範な領域の人材を広範な範囲で動員することも可能であり、都市などで行われる事業と比較すると、どうしても「企画力に欠ける」側面が出てくる農村地域での事業においては、NPO 的枠組みが有する、このような柔軟な枠組みは地域おこしにとって重要な機動性を発揮する可能性があると考えられる。

3 . 今後の課題

しかし一方では、NPO 的ネットワークによる調査活動が有する限界も見えておかなければならない。通常専従スタッフのメンバーが限られ、資金面での限界のある NPO による活動では、ネットワークとして点をつなぐことは可能であっても、地域全体に事業を普及し、面としての地域資源起こしをするような力は有していない。

あくまでも NPO による活動では、農村における新たな資源価値をめぐって、都市住民と農村住民をたくみに結びながら、その活動自身が一つのモニターとして地域の新たな事業展開の呼び水ともなるといえるものであり、今立町のような農村地域においては、今後も行政などの支援の動きを伴わなければ、大きな成果を期待することは不可能であろう。

この点で、今回の調査活動においては、必ずしも行政と NPO による活動の有機的な連携の活動は今までのところうまく促進しているとはいいがたい。こうした点から見ると、今回の調査活動だけに限って見ても、以下のようにいくつかの反省点が存在していると考えられる。

一つは今回の地域資源・文化資源の調査活動においては、あくまでも調査主体が調査対象を調査するというものにとどまり、調査活動が呼び水となって、調査対象である住民が自らの地域資源や人材としての自らの意味を省みるという過程までは届かなかったと言うことである。

この調査が当初想定した調査の枠組みは、長期滞在型のフィールドワークとして、地域の住民とともに生活しながら、地域内部の様々な伝統的資源を掘り起こし、それを現代社会とコーディネートしようとするものであった。そこでは、地域資源の調査を通じて、地域社会の住民も自らの生活と現代社会とのよりよいつながりを自覚していく、地域住民による、地域住民のための地域住民の学として

の「地元学」的なものを創出していくということが意識されていた。

南坂下で、研究員の一人である石山が試みたアクションリサーチの中には、今後こうした「地元学」につながっていく過程の萌芽も見られるが、全体としてみれば、いまだ地元住民の参加を得た十全なかたちでの取り組みにはなっておらず、今後の大きな課題といえる。またこうした「地元学」の創出のためには、集落ぐるみ、行政のサポートという地域組織との連携が必要なことは言うまでもない。

また、たとえばインターネットが広範に発達した今日、地域内部の資源調査においても情報の集積場所として、ホームページを立ち上げるなどすれば、調査過程が、現在進行形の形で住民に還元され、住民も調査活動そのものの担い手として参加することが可能となる。限られた調査活動費用の中でこうしたことが困難であるならば、今立町のホームページの一角にこうした調査活動を行っていることを住民に開示し、協力を呼びかけ、またホームページの一部にその機能を担わせることも出来たと考えられる。

こうした点から見るときにも、NPO と行政との活動上の連携の不十分さが、「地元学」創出に向けての一つの壁になったことは惜まれる。今後の課題として、地域資源、地域文化の掘り起こしの作業を十全なものとしていくためには、調査活動において「地域資源」発掘の呼び水としての自由な枠組みを有する NPO など外部者による作業を引き続き積極的に導入するとともに、同時にその調査活動を住民・行政がともに協働して行うというスタイルを確立していくことがなによりも重要なポイントとなっていくだろう。

参考文献

- 井上和衛・中村攻・山崎光博『日本型グリーン・ツーリズム』都市文化社，1996．
- 掛谷誠編『白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究』平成元年度科学研究費補助金（総合A），1990．
- 北川泉編著『森林・林業と中山間地域問題』御茶の水書房，1995．
- 北尾邦伸「森業（もりぎょう） - 参加・協約による新たな里山づくり」
- 北川泉編著『森林・林業と中山間地域問題』御茶の水書房，1995．
- 宮崎猛編『グリーン・ツーリズムと日本の農業』農林統計協会，1997，11 - 27．
- 持田紀治編『むらまち交流と地域活性化』家の光協会，1995．
- 『山村再生 21世紀への課題と展望』【年報】村落社会研究 = 34，1998．農文協
- 佐々木泉「ごろ寝だけして帰る人もいる「かやぶきの里」の貸し農園 - 京都府美山町 大野安彦さんと「江和ランド」」『日本的グリーン・ツーリズムのすすめ』現代農業 2000年11月増刊，2000．
- 祖田修『現代経済社会と農業 - 「着土」の時代に向けて』農文研ブックレット NO.1 農耕文化研究振興会，1989．
- 祖田修『市民農園のすすめ - 見る緑から作る緑へ』岩波書店，1992．
- 祖田修『着土の時代』家の光協会，1999．
- 祖田修 21ふるさと京都塾編『人と地域をいかすグリーン・ツーリズム』学芸出版社
- 佐藤豊信『農村型リゾート』明文書房，1992．
- 杉村和彦他「「緑」を耕す連帯 21世紀の都市 農村関係試論」『都市・農村の交流と結合 21世紀に向けた都市・農村関係論試論』平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書，2001．
- 山崎光博・小山義彦・大島順子『グリーン・ツーリズム』家の光協会，1993．
- 依光良三・栗橋祐子『グリーン・ツーリズムの可能性』日本経済評論社，1996．

報告 1

受けての日常生活からみたグリーン・ツーリズムの可能性

(特)森のエネルギーフォーラム

調査・研究員 石山俊

1. はじめに - 様々な農村体験とグリーン・ツーリズムをめぐる戸惑い -

今、日本中の農村でグリーン・ツーリズムがもてはやされている。

レジャーの多様化とともに、極度に非人間化された都市に暮らす人々が自然あふれる農村体験すなわちグリーン・ツーリズムに関心を持ち始めたのである。一方、受け手となる農家も、グリーン・ツーリズムによる地域活性化に期待をよせている。

しかし、グリーン・ツーリズムといってもその形態は多様である。たとえば、従来の観光の延長線上に位置する体験事業、この10年で急速に広まったアウトドアレジャー型などである。したがってグリーン・ツーリズムとは何かという問いに対して決まった回答はない。携わるそれぞれの立場の人々がそれぞれのグリーン・ツーリズム観をもっているといえる。

そもそもグリーン・ツーリズムという語は行政用語としての意味合いが強く、その具体的なイメージはかならずしも明確ではない。実際、筆者が話を聞いた範囲において、グリーン・ツーリズム受け手となるグリーン・ツーリズムにかかわる農家の人々は、グリーン・ツーリズムという語を聞いてもそれがどういうものか当初は検討がつかなかったという。農家民泊の受け入れや田んぼのオーナー等の諸活動に参画する中で、皆それぞれのグリーン・ツーリズム観を養ってきたようである。

本報告におけるグリーン・ツーリズムの定義としては、「都市住民の農村体験」というおおまかなものにとどめておきたい。受け入れる農家同様に、都市住民もそれぞれの思いをもってグリーン・ツーリズム観をもっており、訪れる人々が地域の資源を自分なりに楽しめばよいからである。また本稿で「グリーン・ツーリズム参加者」というときは主に都市住民を想定し、「受け入れ側」というときは、グリーン・ツーリズム参加者を末端で受け入れる農村住民、いわゆる農家を想定していることをことわっておきたい。

グリーン・ツーリズムの楽しみ方は、参加者の志向だけではなく、滞在スタイルによっても様々な可能性がある。短期・中期・長期滞在などである。そしてその極相状態として、農村への移住もあろうる。

都市住民たちにとって、農村に住み暮らすことを最終的な目的としないまでも、短期・長期滞在を繰り返しながら気持ちをリフレッシュできるグリーン・ツーリズムは魅力に満ちたものである。そしてそのような農村滞在の延長線上に、都会暮らしをやめて田舎暮らしをしたいという希望を潜在的にもっている人々も少なからず存在するはずである。しかし、都市での仕事をやめ、便利な住環境を離れる決心までいたる人々はほんの一握りであろうことは容易に想像がつく。仮に田舎暮らしを決断したとしても、どのように住処を見つけ、どのように暮らしていけばいいのか。有用で具体的な情報はまだまだ少なく二の足を踏んでいる人は少なくないだろう。

一方グリーン・ツーリズムの受け手となる農村では、どのように都市住民を受け入れていくかといった問題を解決していく必要がある。「自分が長年住み慣れたありきたりの田舎で、どのように都市住民を受け入れればよいのか、町の人々は何を面白がるのか」、「何の変哲も無い」農村に住む人々にはこのような戸惑いがある。

以上のような問題意識にもとづいて、今立型グリーン・ツーリズムに活用しうる地域資源、都市住民と農村住民とをどのように結びつけていくことができるのか、ということの本報告主なテーマとして考察を進めていきたい。

2. 調査方法

本報告は、客観的に集めただけではなく、筆者が主な調査地である、今立町南坂下区に1年間かわりながら聞き書き、体験したことをもとに、筆者の主観を少なからず交えながら書かれている。そこで、まず筆者がどのような経緯で調査に関わるようになったのかを明らかにすることが賢明であろう。

筆者は、東京で生まれ、神奈川県で育った。その後も静岡、名古屋と居を変えてきた。したがって筆者の関心と、グリーン・ツーリズムに参加する都会の人々との関心は一致する点が多いと考える。ただし、筆者は1993年から97年までNGOの援助活動でアフリカ、チャド共和国の小さな街で暮らしたことがある。その経験から、経済や政治の周辺に置かれつづけた、農村に対する関心をもっている。

筆者が調査者として南坂下を中心とした月尾谷にかかわりはじめたのは2004年の4月以降である。実際に住み始めたのは9月以降であるが、4月からは調査の一環として借りた水田や畑で作業をしながら、毎月27日の区の定会に出席しながら調査を継続させてきた。

その方法はアクションリサーチとよばれる。アクションリサーチとは、ただ単に客観的な調査者としてではなく、調査地域で積極的に行動を起こしながら調査する方法である。調査者が客観的な立場に立とうとしても、その調査者が固有の人生を歩み、固有の考え方をもっている限り真に客観的とはなりえない。

客観的な調査者というよりも、むしろ地域の一員として調査地に関わった方が、地域住民に対する共感を基礎にしたよりリアリティがある調査ができると考える。また調査される側の人々も、なにやらわけのわからない調査者を迎えるよりも、地域で協同する者を調査者に迎えた方が話やすくなることに間違いはない。

筆者が南坂下に住み始めた一番の理由は調査のためであるが、筆者自身長い間田舎暮らしに強い関心を持っていた。本報告は調査報告というだけでなく、実際に田舎暮らしにあこがれる1都市住民のモニターの観点を多分に備えていると考える。

3. 域資源からみたグリーン・ツーリズムの可能性

3.1. グリーン・ツーリズムをめぐる農村の現状

農家の戸惑い

田舎には何もないけど、きれいな空気、美味しい水、とれたての農産物がある。これは私自身の農村体験のなかで何度も耳にした言葉である。中心的な調査対象とした、南坂下区は、月尾谷とよばれる谷の最奥に位置し、豊かな水源を持っているために、住民はこうした自負をもっている。ただ、このような農村の長所をどうやって都会人の受け入れに生かしていくか、ここにグリーン・ツーリズムの受け入れ側の戸惑いがある。空気や水といった何の変哲もないものは、従来の観光資源とはなりえなかったからである。

しかし、「空気と水はタダ」といわれた時代は過ぎ去り、都会の人にとっては空気や水そして夜の静寂までもが貴重なものとなり、自ら追い求めなければならないものになった。

グリーン・ツーリズムに活用できる地域資源は、従来の観光資源とは違い、まさにありのままの農村生活の中にある。筆者は1年間に及ぶ調査の中で、ありのままの農村の魅力に惹かれつづけ、作られない資源こそ有用なものなのであると考えるに至った。

見える資源、見えない資源

ではグリーン・ツーリズムに活かすことができるありのままの地域資源とは何だろうか。とりあえず、見える資源、見えない資源に分類してみよう。

見える資源とは何か。まず農村景観をあげることができる。筆者が調査地とした南坂下は西に開けた谷の中に位置している。したがって三方は山に囲まれている。つまり緑が多いということだ。それは都会人の心をしばしば満たしてくれるだろう。実際、調査の一環としての農作業中、筆者はこの緑の景観に大きな満足を覚えたものだ。

次にあげることができるのは、農村景観のもうひとつの雄である、民家であろう。幸いというべきか、南坂下には古民家と呼ぶことができる、築90年程度の民家が少なくはない。その他には、祭りなどの地域の行事をあげることができる。

それでは見えない資源とは何だろうか。完全に見えないとはいえないまでも、まず地域の組織をあげることができる。規模が小さい地域でも様々な社会組織が存在し機能している。次にあげることができるのは、地域の人々の考え方・メンタリティであろう。

グリーン・ツーリズムによる地域振興を考える場合、見える資源はもとより、見えない資源の魅力に参加者に理解されることが重要である。

3.2. 調査結果から

3.2.1. 生活暦から可能性を探る

グリーン・ツーリズムの主な舞台は農村である。緑多い農村が舞台になるゆえ、グリーン・ツーリズムと命名されたのだ。

多くのグリーン・ツーリズムのプログラムに農業体験が組み込まれていることは、農村地域の資源・特色を有効に活かすための必然的な結果であろう。しかし、グリーン・ツーリズムの核となる農業体験は、受け入れ側にとって大きな負担である。農家は、農繁期には猫の手を借りたいほど忙しく、客を受け入れる時間的・精神的余裕が少ないからである。

そこで、まず農村の生活暦を検討しながら、受け入れ側に負担がかからないグリーン・ツーリズムプログラムの可能性について考察を進めていきたい。

基本的な生活サイクル

1) 農業

筆者が1年間の生活経験から得た南坂下の生活暦を図1に示した。南坂下の自然サイクルは、北陸地方の他地域と同様に、無積雪期、積雪期にまず大別することができる。無積雪期は、農繁期と重なり、南坂下の人々は農作業に勤しむ。この期間はおよそ3月中・下旬から12月初旬である。積雪期は田畑での農作業はないが、室内での収穫物の管理等の作業は続く。ただし人々が農繁期と認識しているのは無積雪期であるようだ。

南坂下の農作業の中心はやはり稲作であり、次いでサトイモの生産である。収穫されたサトイモは、農家組合を通じて学校給食用に出荷される他、知人を通じて関東方面の家庭へ直接出荷する生産者も見受けられる。サトイモは南坂下の特産物であると人々は考えている。

こうした作物の他にも、ナス、ピーマン、キュウリ、トマトをはじめとした夏野菜、ハクサイ、ダイコンなどの秋、冬野菜、ジャガイモなどが栽培される。こうした野菜は市場に出荷することはなく、自家消費用である。

またダイコンなどの冬野菜は漬物などにされ保存食として冬の食糧となる。いうまでもなく農業は、自然を利用する生産行為である。それゆえ、農業は天候、気温などの自然条件を先読みしながら営まれる。したがって、農繁期はいかに自然条件とうまく折り合いをつけて農産物を生産していくかといったことが、農家の優先事項となる。このことは、グリーン・ツーリズム参加者を受け入れ、もてなすことへの大きな障害となる。

2)林業

南坂下のほとんどの世帯は山林を所有している。山仕事の内容は、枝打ち、下刈り、苗起こしである。枝打ち、下刈り作業は周知のとおりであるが、苗起こしとは、冬の間雪の重みで傾いた5年から10年生の苗を垂直に立て直す作業である。

枝打ちは冬の積雪期におこなわれる。ある人の説明によれば、冬の方が木に登りやすく作業がしやすいという。下刈りは6月、苗起こしは3月におこなわれる。囲炉裏や薪風呂を使用する世帯では、薪集めも重要な作業である。

南坂下でいとなまれる林業は、農業ほど季節的な自然サイクルには左右されない。それは樹木の成長サイクルが農作物に比べて格段に長いという生物的特性と、林産物生産が農家の生活サイクルを決定付ける重要な要素ではないという社会・経済的理由に起因する。

このことを逆に考えれば、仮に冬の林業体験や樹木オーナー制度というプログラムが確立できれば、農業プログラムと同等の魅力を持たせることができ、かつ受け入れ農家も余裕をもって対応できるものと考えられる。

3)行事等

かつて、日本の農村では農耕儀礼、冠婚葬祭など様々な儀礼・行事がおこなわれてきた。これらの儀礼は、基本的には現代にも受け継がれているが、その形態はかなり変化した。その理由は、構成員の高齢化、過疎化など農村の社会変化と密接に関係する。

南坂下では、秋祭り、秋葉山火祭りなどの祭礼行事、社会奉仕、クリーンキャンペーンなどのボランティア行事、お手の雪囲いの設置撤去といった宗教関連行事がおこなわれ、基本的には各世帯から1名が義務的に参加する。こうした行事への参加は、筆者のような新規に住み始めた者にとっては当初は「義務付けられた行事」という印象をうける。しかし、よくよく観察してみると、地域の人々はいかにもあたりまえのものとして参加しているように見受けられる。

ただしこれらの行事への参加は、地域の人々と交流し、認知される良い機会であるともとらえることができる。グリーン・ツーリズム参加者はこうした行事に参加することによって、地域の中に溶け込むことができ、住民のものともまではいかないまでも、地域に対する親近感が生まれやすくなる。実際、筆者はこれらの実際に行事に参加しながら地域に関する親近感とともに、様々な情報をえることができた。

こうした情報収集は、定住する者にとってはもちろん、短期～長期滞在をするリピーターにとっても有用である。

小活

特に農業、林業を中心とした南坂下の生活暦は1年を通じて自然サイクルと合致して営まれる。そうした生活暦に対して人々は、「1年中忙しい」という認識を持っている。ただし筆者の観察によると、1月2月は野外での農作業がなく、山仕事はあるとはいえ、人々は比較的ゆっくりとした時間を過ごしているように思える。

ところで、グリーン・ツーリズムの試みの一環として、今立町では、田んぼのオーナー制度、農家民泊や農作業体験を企画している。この企画は参加者にとっては非常に好評であるようだが、受け入れ側の視点からみたらどのように写るのだろうか。

筆者自身が理想とするグリーン・ツーリズムは、いつでも来ることができ、受け入れ農家に対して負担がすくない内容といったものであるが、地域にまだなれない訪問者に対しては、どうしてもある程度の「面倒」をみななければならない。果たして農家にそれ程の余裕があるかどうかが問題になってくる。

実際今年度おこなわれた田んぼのオーナー制度をみると、農家自身もまだ受け入れになれていないという状況もあるが、実際に割かれる時間よりも、精神的な余裕の方が問題になるものと思われる。

こうした種々の農業体験プログラムの今後の課題は、どのようにして受け入れ農家の時間的、精神的負担を軽減しながら、グリーン・ツーリズム参加者に対応していくかという点にある。

3.2.2. 農村の社会組織とグリーン・ツーリズムの受け入れ

グリーン・ツーリズム参加者はリピーターになることによって、ある程度自由に農村で活動ができるようになった後、もう少し農村社会に近づきたいと考えはじめるであろう。そうしたとき、どのようにしたら農村社会は参加者を受け入れることができるのであろうか。

ここでは農村の社会組織の視点から、この問題をみていきたい。

農村を構成する様々な組織

村落社会の共同性が薄くなった現代でも、村には様々な組織があり機能している。ここでは、現代の農村社会を維持している各組織についてみていこう。

1) 定会と区長

まず農村全体をまとめる組織として、定会が存在する。定会は正確に言えば組織ではなく、1ヶ月に一度おこなわれる寄り合いのことである。南坂下では毎月27日におこなわれる。定会には各世帯

から1名の出席がとめられる。新住民がなによりも密接にかかわるのが定会であろう。定会ではまず、行政や区長会からの報告などがされ、討議事項を審議していく。こうした議事がひととおり終わると、農家組合、林業組合、婦人会などから必要に応じて議題が提出され、討議されるのである。

この定会で進行役をつとめるのが区長である。南坂下の場合、区長は選挙で選ばれる。しかし選挙制になったのは2005年度の区長からであって、それまでは4世帯の間で持ち回り制で区長が選ばれていた。区では、住民共同の利益のための様々な出費がある。たとえば区水道や区道の整備等である。

こうした事業に対して、行政からの補助金が出る場合もあるが、区民の負担もそれなりにある場合が多い。そうした区の出費を補填するために、毎年2回(南坂下では、8月と12月)区を構成する各世帯から各家の状況に応じてお金をあつめたのである。近年は、区で積立金をつくり、その中からそうした支払いをまかなうため、区長が立て替え払いをする必要がなくなった。

しかしかつては区長が立て替えていたために、区長の役割を担える家は限られていたのである。そのため4人の持ち回り制がおこなわれていたのである。しかしそれはもう過去の話で、誰でも区長をつとめることが可能になったのだが、南坂下では長い間持ち回り制の慣習が保たれていた。

筆者が観察した限り、区長の仕事はかなり忙しい。今年度は特に福井豪雨があったために、その後処理のために区長が奔走した。こうした区長の仕事に対して報酬が支払われることはない。どちらかといえば、自分のポケットマネーからの出費を余儀なくされることが多い。こうしたことから区長になることができるのは、時間的に余裕がある者に実質的には限られるのである。したがって、働き盛りの者よりも第一線を引退した比較的高齢な者が区長に選出されるのも必然なのである。

区長の役割は様々である。たとえば定会でできた事項などのうち、町などの行政機関と関係あるものは、区の代表として陳情、申請、報告などをするものである。その他には、町全体の区長が参集する区長会への出席等である。区長の役割を一言でいえば、区の住民のまとめ役であり、区と町との間をとりもつパイプ役であるといえる。

区全体のまとめ役としての区長の他にも、副区長、委員という役職がある。副区長は通常前年の区長がなる。定会に間に合わない緊急の決議に際して、これらの役職についている人々が協議し、緊急事項を決定する。

2)農家組合と森林組合

南坂下の世帯はほとんどすべて田畑、山林を所有し、兼業が多いとはいえ農業、林業を営んでいる。こうした農業者、林業者の組織が農家組合、森林組合である。

グリーン・ツーリズム参加者とその極相状態として、農村に住み始める新規住民には、こうした組合組織は無縁であると考えがちであろう。しかし農村の移り住む新規住民の大半は農地を借り農作業

をするだろう。そうした場合、間接的にこのような組織と関係をもつ。それは、借りた畑に関する事柄を通じてのものであったり、多くの農地を害獣から保護するための電気柵に関してのものである。

農家組合の活動内容は、減反の割り当て、田の協同防除といった稲作に主に関係する組合である。組合長は以前は区長が兼任していたが、5年前に農家組合長が区長とは別に選出されるようになった。

電気柵は積雪前にはとりはされ、春になるとふたたび設置される。新規住民がこうした協同作業へ積極的参加することは地域住民とよりよい関係を築くためには重要である。

森林組合へのかかわりは、グリーン・ツーリズム参加者や新規住民にとっては、農家組合ほどのつながりを持つ可能性は少ないが、農家組合と同様に間接的なかかわりを無視することはできない。

3)その他の組織

ここまで述べた、区全体の定会組織、農家組合、森林組合のほかにもいくつかの社会組織がある。

たとえば、青年団、壮年会、老人会、婦人会などである。これらの組織は、生活上必要不可欠のものであるというよりも、地域のまとまりと生活の質の向上というどちらかといえば付加価値的な意味合いをもつ。年々高齢化していく、南坂下区のこのような組織は次第に形骸化しているという印象を筆者はもった。

しかし消防自警団は今でも重要な役割を担う。南坂下の自警団は、隣の別院区と協同で消防器具を所有、管理している。特に冬場は火災が多く、また南坂下一帯は最寄の消防署から距離が離れているため、自警消防団の重要性は昔とさほど変わらない。しかし、自警消防団への参加は全員の強制的な参加ではない。組織は定員制で欠員がでるときに、退く人が後任者を見つけるものであるので、新規住民がそれに参加する可能性はケース・バイ・ケースであろう。

また寺や神社などに関する組織もある。寺には檀家組織、神社には氏子組織がある。これらの組織も、新規住民には縁遠いものであると思われがちであるが、たとえば寺の雪囲いの組立て、撤去作業や秋祭り前の神社境内の清掃は、住民がほぼ総出でおこなうので、組織に正式に参加しないとはいえ新規住民は積極的に参加した方が、地域住民とのよりよいコミュニケーションがとりやすくなることはいうまでもない。

様々な区の活動

グリーン・ツーリズム参加者がさて田舎に暮らし、新規住民になろうというとき、こうした村落組織や住民に対してどのような関係を築いていけばよいのだろうか。

もっとも関係が深いものは定会であろう。ここは農村のもっとも重要な決定・討議の場である。住民となった以上は定会に参加する必要がある。

定会への参加の他、協同作業にも参加する必要がある。協同作業には、3月、9月のクリーンキャンペーン、7月の社会奉仕などがある。クリーンキャンペーンとは、集落および周辺道路のゴミ拾いである。

小活

これまで地域に新たに住み始めるといったことを念頭において、地域社会組織についてみてきた。ただこうした組織や行事に参加する機会は、住むまではいかなくとも、リピーターとなって地域に通い、滞在日数が増え、住民との関係が深まるにつれて多くなるはずである。

グリーン・ツーリズム参加者はこうした組織、行事に積極的にかかわるようになってあらためて地域の仕組みを理解するはずである。また、それらの人々を受け入れる地域住民もグリーン・ツーリズム参加者をお客さん扱いせず、地域の人々と自然と一体感を持てるこうした行事への参加をさりげなく仕向けることが、両者の距離を狭める良い方法となるはずである。

グリーン・ツーリズム先進地域といわれる場所では、農村の魅力を巧みにプロデュースし、人気を博している。しかし、都会人向けに演出を施した時点で、グリーン・ツーリズムは本質的あり様を失うことになる。グリーン・ツーリズムに関心を抱く多くの都会人は作られた空間ではなく、あるがままの農村にあこがれているからである。そうした空間、時間に気軽に触れることができる機会を演出することが今立型グリーン・ツーリズムにとって有効な方法であると筆者は考える。

5. 結びにかえて

今立町グリーン・ツーリズム推進協議会が発足し、いくつかのグリーン・ツーリズムプログラムが実施され、今立町におけるグリーン・ツーリズム事業は、軌道にのりはじたところだといえる。最後に、このようなグリーン・ツーリズム事業を継続するための課題とそれに対するいくつかの提言を試みたい。

「もてなす」発想の転換

これまで再三強調したように、グリーン・ツーリズムの受け入れ側となる農家にとって、「接客」の時間的、精神的負担は少なくない。そのような状況の中で、受け入れ農家が都市住民を迎え続ける理由はそれが楽しいからであろう。しかし、こうした時間的、精神的負担を軽減する方向でグリーン・ツーリズム事業が展開しなければ、持続的な事業のためには多くの困難が伴うものであることは容易に想像がつく。

今立のファンをつくり、リピーターをつくりだそうと考えるとき、参加者の滞在形態を、短期 中

期 長期 永住という発展形態をたどると想定すると、各段階における受け入れ方法は参加者の滞在形態発展に伴って変化するであろう。

現段階では短期段階、あるいは中期への移行段階であると筆者はみる。この段階ではグリーン・ツーリズム参加者はまだ「客」としての扱いを受けている。短期滞在型のうちもてなす方も過度の負担を強いられてはいないようだ。しかし、今後中期、長期滞在へと移行する可能性を考えると、グリーン・ツーリズムの滞在場所、もてなす方法などを再考する必要がある。現在のグリーン・ツーリズム企画は、農家民泊を主軸にした滞在である。今後は参加者が自炊したり、空いた時間に自由に宿泊できる、中・長期滞在可能な安価な宿泊施設を確保する必要性がある。

また、参加者が空いた時間に自由に作業できる農地の確保も重要な課題であろう。ただし、そうした滞在・参加形態になったとしても、地域住民と十分にコミュニケーションがとれるようなハード、ソフトの開発・模索も欠かすことはできない。

このことは次に提言する、中間カテゴリーの創設というものに関係する。

中間カテゴリーの創設

筆者が実際農村に住み込んだ経験から、中・長期滞在者、新規住民にとっての大きな問題は、地域社会の中でどのような、ポジションを確立していくかのあると考える。

これまでの日本の農村社会は「身内」と「よそ者」という2つのカテゴリーで成り立ってきたといえる。身内とは生活を維持するための共同体的関係性が強い。他方よそ者または客は、排除するかもてなすかといった対象である。農村社会に都市住民が入りこんでいくためにはこうした2項対立的な分類の中間に位置するカテゴリーの創出が必要である。

それによってグリーン・ツーリズムの中・長期参加者、あるいは新規住民農村社会で生活するための義務をゆるやかに果たしながら、受け入れ側との関係を構築していけると考える。

中間者(メディエーター)の重要性

グリーン・ツーリズムが成功するか否かは、受け入れする農家にかかっているといっても過言ではない。受け入れ農家が都市住民を接することを楽しむことができるかどうかということだ。もし可能ならば、こうした受け入れ農家あるいは農家グループが、積極的にグリーン・ツーリズム事業を企画・実施できれば、受け入れ側のオーナーシップも向上し、真に地域密着型のグリーン・ツーリズムとなりうる。

しかし本来主体となるべき農家が自ら主要アクターとなることは、現代位階では難しい。そこで、都市住民と農家をつなぐ中間者が重要になってくる。この中間者には行政機関、第3セクター、NPO

など様々な組織がなりうる。ただし、グリーン・ツーリズム先進事例といわれる事業をみると、制約が少ない第3セクター、NPO化して行政機関とは切り離された期間が担っている場合が多い。中間者となりうる、組織をいかにつくりあげていくかは、グリーン・ツーリズム事業発展の大きな鍵となるろう。

(特)森のエネルギーフォーラムのとりくみ

ここまで述べてきた提言をふまえ、最後に(特)森のエネルギーフォーラムの取り組みを紹介したい。本年度の調査委託を受け、地域社会に根ざした調査を継続させてきた。これまで記述してきた報告は、今後のグリーン・ツーリズム推進のための有用な情報となりうることを期待しているが、1年間かけて蓄積してきた情報をもとに、調査結果を展開させ当団体の事業に結びつける試みを計画している。

その計画は「地域を感じ、世界を知るエコロジー体験講座」と題し、南坂下での農作業と、世界の人々の暮らし振りを知ろうというものである(資料3)。そのプログラムの中には「南坂下の水源探し」や「保存食づくり」といった地域資源を生かした内容も多くもりこまれている。

こうした取り組みを地道に継続させていくことによって、グリーン・ツーリズムの受け入れモデルとなりうる南坂下の活性化の一助になることを期待している。

資料 1

説明：写真資料、調査方法、調査事項に関する写真

4月、5月は詳細な調査はせず、今立町および周辺地域の一般情報、および南坂下での田植え作業、畑作業をしながらのアクションリサーチをおこないました。アクションリサーチとは、簡単にいえば、実際にその社会の生活を体験しながら調査を進める方法です。つまりわたしたちの例でいえば、畑や田んぼでの作業をしながら、南坂下の風土を理解し、作業のアドバイスを受けながらその中からいろいろなことを教えていただくという狙いです。

以下簡単に4月、5月におこなったことを整理してみます。

4月26日 横住、渡邊光一さん、漆掻き、鎌商いなどに関する聞き取り調査

4月29日 南坂下の畑作業、畝立て、種まきなど

4月30日 八石、蓑輪又兵衛さん、聞き取り調査、土器、古墳について

5月8、9日 田植え、畑の種まき

5月19日 朽飯、上坂武信さん、漆掻きに関する聞き取り調査

5月22日、23日、畑の草取り、種まき

5月22/23日 田んぼのオーナー

5月27日 南坂下区 常会出席



木炭田植え機登場!



混作を試す

混作とは?

混作とは同じ畝でいろいろな作物を同時に育てる農法です。当会の副理事である県大の杉村先生は長い間アフリカのタンザニアで農民の生活の研究をしてきました。杉村先生の調査地ではトウモロコシ、ラッカセイ、オクラなどの多くの野菜が混作されています。今回の畑作業を始めるにあたり、「それではその混作を私達もやってみましょう」ということで、混作を試すことになりました。実はこの混方法は日本でも実践しているかたがいるようで、『現代農業』の5月号でもとりあげられていました。今回はその資料をお配りしますので、興味がある方はあとで読んでみてください。

南坂下の方々にいろいろとお話を伺うのは6月以降を予定しています。どうかよろしく願いいたします。

調査経過報告(6月)

NPO 法人森のエネルギーフォーラム

森のエネルギーフォーラムは様々な活動に取り組んでいます。それぞれの内容に関しては機会がある度に少しずつ説明していきたいと考えていますが、活動は実践活動と、調査研究活動に大きく分けることができます。

実践活動とは自然エネルギーに関する研修、フォーラムの開催、子供を対象にした自然エネルギー教室などです。調査研究活動とは、現在南坂下で進行させているように、将来的に地域に資する活動のための基礎的な情報を集めることを目的としています。

5月、6月は調査研究助成の申請シーズンです。様々な調査を実施するためには、ある程度の経費が必要で、それを得るための助成金の申請は重要な作業です。森のエネルギーフォーラムとしても、多岐に渡る活動資金を得るためにいくつかの申請書類を提出しました。

その中でも、下に記した「福井ブランド」に申請は、今立および南坂下の地域おこしに直結する重要なものであると考えています。申請の中には、古民家再生という項目を盛り込んであり、申請が通れば、南坂下にグリーン・エコツーリズムの拠点を築くことができる可能性が大きくなります。

ただ申請が認められる可能性は、残念ながらそう大きいものではありません。

このような、調査・実践活動のための資金確保は大きなポイントではありますが、1番大切なことは、皆様の理解を得ながら、少しずつ確実に調査を進めることだと考えています。調査の歩みは決して速くありませんが、今後も引き続き、ご理解、ご協力の程よろしくお願いいたします。

6月の主な活動

- | | |
|-------|--|
| 6月6日 | 水田の草取り |
| 6月12日 | ハツ杉森林学習センター 朴葉飯(ホオバメシ)とチマキ講習会
ホタルと箏とピアノの夕べ |
| 6月14日 | 福井県立大学地域貢献事業案について 津村文彦講師のヒアリング |
| 6月15日 | 雁皮の栽培地 福井県グリーンセンター 今井三千穂部長さんから指導を受ける |
| 6月17日 | 岡本小学校 総合学習 エネルギー学習で風力発電について講義
福井県「ふくい環境力向上プロジェクト推進事業」で、岡本小学校ふるさとエネルギー探しマップ作り提案の打合せ
ふくいブランド修正案説明のため県庁ふくいブランド推進室訪問 |
| 6月18日 | ふくいブランド資料提出、畑手入れ |
| 6月22日 | ふくいブランド実行委員会準備会開催 |
| 6月23日 | ふくいブランド資料提出(研修費用についての資料、本、新聞記事コピーなど) |
| 6月25日 | とよなか市民環境会議&NPO 法人とよなか市民環境会議アジェンダ21合同総会
記念講演 大阪府豊中市 |
| 6月26日 | 石山研究員引越し |
| 6月27日 | 南坂下区常会出席 |

ホタル見コンサート



ホオバ飯とチマキの講習会



7月の活動報告

平成 16 年 7 月 27 日
森のエネルギーフォーラム

南坂下区民の皆様方に対して、なによりもまず福井豪雨について心よりお見舞い申し上げます。そして復旧作業にさしてお手伝いできなかったことをお詫び申し上げます。私達がお借りしている、水田も半分程度土砂に埋まってしまいました。これについては残念としかいいようがありませんが、せめて区民の方がやっておられる水田でなかったのは不幸中の幸いであったと思います。

さて先月ご説明いたしました通称福井ブランドは 7 月 16 日に採択が決定しました。この計画は古民家再を中心に据えておりますが、これについては森のエネルギーフォーラムを中心として実行委員会を立ち上げ、具体的な内容について協議を重ねていく必要があります。

坂下の NPO 活動拠点と石山調査員の住処については、7 月 9 日に持ち主である、鋸屋さんの承諾を得てすこしずつとりかかっています。

6月～7月の主な活動

7月2日 八つ杉森林学習センター打合せ

7月4日 雁皮採取(福井県種苗センター、武生市)

7月5日 福井県福祉環境政策課ヒアリング

今立町グリーン・ツーリズム推進協議会設立総会参加(福嶋、石山)今立町産業振興課

7月7日 武生商工会講演(増田)

7月8日 岡本小学校環境学習に講師派遣(増田、福嶋、石山)

7月9日 福井市の鋸屋氏訪問

7月17日 坂下 NPO 活動拠点清掃

7月19日 福井県立大学清水先生、加藤君、大海君復旧作業応援

7月25日 道刈り作業参加



7月27日 常会出席

岡本小 環境学習(5年生)



完成した風車



NPO 拠点を清掃する高校生

今月の質問

共同作業について

道刈り・社会奉仕の回数/年、内容：昔と今とで違うか、歴史：いつ頃からしていたか

8月の調査・活動報告

森のエネルギーフォーラム
調査・研究員 石山俊

8月初旬に小中学生を対象にした子どもアートセミナーを開催しました。これは財団法人子ども夢基金の資金助成による活動です。福井豪雨直後の開催であったために、多くの参加を得ることができませんでしたが、少数精鋭で充実した活動になりました。活動内容は、絵画教室やそば打ち体験などで、参加した子ども達はそれぞれ自分なりのペースで楽しんでいました。

この企画は今年度中にあと2回開催する予定です(10月、12月)。前回のプログラムは主に八ツ杉森林学習センターにて行いましたが、今後南坂下の地域資源を利用したプログラムも検討していきたいと思っています。もし何かアイデアがありましたら是非ご一報ください。

8月の主な活動

8月4日 子どもアートセミナーの開催(子ども夢基金助成事業)

~7日 小中学生対象:絵画教室、漫画教室、そば打ち体験、ミニコンサートなど

9日 岡本小学校5年生、環境学習への講師派遣

15日~ 石山調査員、南坂下への引越し準備:ガス、電話、インターネット回線設置、荷物移動など

31日 今立古民家匠実行委員会初会合



子どもアートセミナーの風景

だいこん舎安食さんによるそば打ち体験



参加した子どもも食事の準備を手伝う

先月できなかった今月の質問

共同作業について

道刈り・社会奉仕の回数/年、内容:昔と今とで違うか、歴史:いつ頃からしていたか

9月調査・活動報告

(特)森のエネルギーフォーラム

石山俊

9月になってやっと南坂下に引っ越すことができました。森のエネルギーフォーラムが南坂下を中心に月尾谷の地域資源調査に着手してはや5ヶ月がたちました。私が考えている調査方法は、何もあらたまったものではありません。日常生活の中からの聞き書きを主体にしていろいろな物事を知っていくようにしたいと考えています。その意味では、南坂下に来て、まだ1ヵ月という短い日常生活の中で多くの話をすでに聞かせてもらいました。特に、稲刈り、稲架がけ、籾干し、脱穀、籾摺りなどのコメの収穫にかかわる作業の中で興味深い話を多く聞くことができました。

今後もこうした形で調査を続けていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

9月の主な活動

8月31日 今立古民家プロジェクト実行委員会第1回総会

9月4日～ 石山研究員南坂下へ引越し

9月12日 稲刈り

9月15日 古民家プロジェクト運営委員会



古民家プロジェクト第1回運営委員会

稲刈り、6月にコンサートをした辻さん親子



今月のおまけ：NPO(エヌ・ピー・オー)とは何か？

NPOとはNon(非)Profit(営利)Organization(組織)を略したものです。つまり利益をあげることを目的とするのではなく、公共の利益のために活動をおこなう団体のことを指します。この中には従来あった、役所や省庁の外郭団体などは含まれていません。日本のNPO活動は1990年代に盛んになりました。1998年に特定非営利活動促進法(通称NPO法)が施行されて以来、NPOの設立は益々盛んになってきています。NPO法では活動基盤が整備され、継続的に活動を行うNPOの活動を行いやすくする目的で作られました。この法律の制定によって、NPOの設立や活動が益々盛んになってきています。

それぞれのNPOの活動内容は多彩ですが、おおまかに分ければ、自分達の地域社会を改善するもの、自分達の地域社会以外を改善するものに分けることができます。森のエネルギーフォーラムはのタイプ、私が以前関わっていたアフリカへの支援をおこなうNPOはのタイプです。つづく(たぶん・・・)

10月調査・活動報告

(特)森のエネルギーフォーラム調査・研究員
石山俊

10月にはいりめっきり寒くなってきました。比較的暖かい関東地方で育った私には、10月にストーブをつけることがとても新鮮です。調査活動はあいかわらずのんびりペースで進んでいます。

10月の半ばに開催された第2回こどもアートセミナーは、坂下の古民家が主な会場となりました。歴史を感じさせる家のつくりに参加した子どもだけではなく、大人たちも新鮮な感動を覚えたようです。一方古民家プロジェクトは少しずつ進展しています。10月にも数回の会合を開き、11月には小さなシンポジウムが企画されています。



古民家再生体験



すっかり恒例になった辻守さん(ジミー栗田部)
コンサート

10月の主な活動

8～11日、今立アートセミナー開催、ダンス教室、ミニコンサート、古民家再生体験など

23日 古民家プロジェクト打合せなど

新調査員の紹介

今まで皆様にお世話になった福嶋調査員にかわって10月から淵上調査員が地域資源調査に参加することになりました。淵上調査員の調査項目・形態はまだ確定していませんが、彼はパソコンに明るいのでインターネットホームページ作成などにも活躍してくれると思います。またの機会に本人から挨拶があると思いますが、どうかよろしく願いいたします。

今月のおまけ(先月の続き)NPOの特徴について

先月はNPOとは何かということを紹介しました。今月はNPOの特徴を簡単に説明したいと思います。NPOの大きな特徴は次の2点にあるといえるでしょう。まずNPO活動は、上から強制されるものではなく、ひとりひとりの自発性を尊重します。ですからNPOをボランティア組織であるとみなすこともできるのです。つぎにNPOは基本的には有志の集まりなので、いろいろな問題を考え解決していく上で、従来の公的機関とは違って自由な立場で活動することができます。これが2つめの特徴と言えるでしょう。ただ、NPO活動には公共の資金を使う場合があること、比較的規模が大きな活動であれば影響力があること、これらの理由によって社会的な責任を持っていることは言うまでもありません。

11月調査・活動報告

(特)森のエネルギーフォーラム調査・研究員
石山俊

私の南坂下での生活は、次第に快適なものになってきました。これは NPO の活動の場として少しずつ改装が進んだからです。お湯がでるようになったこと、トイレが簡易水洗になったこと、玄関の板の間(何と呼ぶのでしょうか?)を直し、普通に歩けるようになったこと、台所に薪ストーブが入ったこと・・・この2ヶ月で格段の進歩です。そして、台所の上の部屋?を改修し、私の居所ができました。この部屋にはまだ電気は来ていませんが・・・

素人では出来ない部分は専門の方をお願いしましたが、私の部屋の壁などは NPO の仲間たちと一緒に作業しました。プロの仕上がりにはとうてい及びませんが、自分で手がけたモノだけに愛着が湧いてきました。このことは何も家に限ったことではなく、畑の僅かながらの収穫物も自分で楽しみながら料理をして味わっています。少し余分にとれると都会に住む友達に送りつけることもあります。友達もあれこれ料理して楽しんでいるようです。

11月の6、7日に端政寺でドイツからきたグループのミニ・コンサートを急遽開催しました。これは当初、武生のお寺で行われる予定でしたが、会場の都合が悪くなり、急遽代替地を探して開催する運びとなりました。規模は小さなものでしたが、お客さんと演奏者が身近なコミュニケーションをとれたことはとても面白いものでした。

11月の主な活動

11月6、7日 端政寺でミニ・コンサート

11月14日 つるし柿づくり



端政寺でのミニ・コンサート



つるし柿づくり

11月22、23日 古民家プロジェクト、公開講座&懇親会

今月のおまけ：NPO 活動の財源

先月は NPO の特徴について書きました。今月は財源の話を書きます。NPO は活動をするための資金が必要です。資金は大きく自己資金と助成・補助金に分けることができます。自己資金とは、会員等からの寄付・会費、物品販売等による事業収入が主なものです。助成・補助金とは、国、県、町から、あるいは助成財団・団体からの資金援助によって行われます。森のエネルギーフォーラムではアートセミナーの開催、現在私が主に携わっている地域資源について助成金を得て活動しています。

12月調査・活動報告

森のエネルギーフォーラム
調査・研究員 石山 俊

はやいもので、今年も終わろうとしています。地域資源調査に4月から関わりはじめて、あっという間に日々が過ぎました。森のエネルギーフォーラムにとって、今年は多くの変化が訪れた1年でした。自然エネルギー分野中心の活動から、地域資源調査やグリーン・ツーリズムによる地域振興などにも関わるようになったことが最大の変化でしょう。そして今年から新たにはじめた活動として子どもアートセミナーの開催があります。8月、10月に続いて、12月23日から26日まで、第3回子どもアートセミナーを開催し、参加者が少人数ながらも、充実した活動ができたと思います。特に最終日の26日は南坂下で餅つきをおこない、坂下の皆様に協力していただいたことは、NPOとしても私個人としても、地域に根ざした活動を続けていくうえで大きな励みになりました。この場を借りて皆様に感謝の意を記すとともに、来年も何卒ご協力いただきますようお願い申し上げます。

12月の主な活動



完成した台所上の部屋



南坂下での餅つき

NPO 武生交流会参加

子どもアートセミナー開催

NPO 武生(のっぽ武生)交流会に参加して

12月18日にNPO武生(のっぽ武生)の交流会に参加してきました。NPO武生とは武生市に活動拠点を置くNPO団体の協議会で、38団体が加盟しています。年2回の交流会をおこなっているようで、来年の合併に向けて、今立のNPOの話をお聞きするという趣旨で呼んでもらいました。そこで張り切って森のエネルギーフォーラムの活動を紹介してきたわけです。その後NPO活動に関する意見交換や、森のエネルギーフォーラムの活動に関する多くの質問をいただきました。大変有意義な交流だったと思います。

今立町のNPO団体の数は、武生よりもずっと少なく2団体だけです。そしてNPO武生のような交流組織もなく、行政の支援もまったくといっていいほどありません。

武生のNPOの活動は、環境問題を考えるもの、子どもを対象に演劇を主宰するものなど多岐に渡っています。そして地元で根付いて地道に活動しているという印象を受けました。さらにそのような交流の場を市が支援しているという姿勢に少なからず驚きました。これからもNPO武生との交流は続いています。他団体と交流・意見や情報交換をしながら、森のエネルギーフォーラムの活動をよりよいものにしていきたいと考えています。

1月活動報告

森のエネルギーフォーラム

石山俊

昨夏から始まった古民家プロジェクトは試行錯誤を繰り返しながらも、今まで3回の講座を設けることができました。ただこの計画は、森のエネルギーフォーラムをひとつの母体としながらも、現在では別の組織体として活動がおこなわれています。

このような新しい動きのなかで、NPO 法人森のエネルギーフォーラムの活動も原点を忘れることなく、継続させていかなければなりません。

もともと風力発電、太陽光発電、薪や炭などの木質エネルギー利用といった当会の活動は、今年度からグリーン・ツーリズム(平たく言えば、継続的な田舎体験)を見据えた地域振興にまで巾を広げました。

私がここで、町の委託事業である地域資源調査をすることになったのも、こうした経緯から出発したものです。地域資源調査の報告書は3月に提出しますが、こうした調査を踏まえて、南坂下の良さを生かした次の活動ステップを考える時期にきています。

そこで考えられたのが「地域を感じ、世界を知るエコロジー体験講座」です。これは青少年やその親等を対象にして、田畑を耕しながら世界の人々の暮らし振りを知ろうという企画です。この企画は今年度から森のエネルギーフォーラム事業として始まった「子どもアートセミナー」農業版と考えることもできます。今年の経験をふまえて、現在南坂下で、お借りしている田畑を有効利用し、地域に密着した活動の和を広げていくことができるのではないかと考えています。さらにハツ杉森林学習センターを始めとした他団体と協力し、地域に根ざしたグリーン・ツーリズムの実践も森のエネルギーフォーラムの重要な活動になるでしょう。

1月の主な活動

-県立大学オープンカレッジへの講師派遣、参加

-古民家プロジェクトへの参画



県立大学、オープンカレッジ



古民家プロジェクト、遊作塾の看板

2月活動報告

森のエネルギーフォーラム

石山俊

森のエネルギーフォーラムでは新たなプログラムを2月から始めました。それは連続講演会「ひろば」と題され、2週間に1回程度開催される予定です。その内容は、ミニコンサート、講師の話題提供、おしゃべりタイムの3本柱でなっています。森のエネルギーフォーラムは今立町を本拠にして、会員が自分の興味に沿って自由に活動してきました。こうした自由な活動にくわえて、最近子どもアートセミナーや地域資源調査などNPO団体として、取り組んでいる活動が増えてきました。そこで、今までなされてきた会員の自由な活動だけでなく、NPO団体としての核をつくり、いろいろな人々にNPO活動に関心を寄せてもらう必要が生じてきました。こうした経緯で「ひろば」が企画された次第です。まずはNPOの主要なメンバーが話者として登場しますが、話題の幅を広げるために今立町グリーン・ツーリズム推進協議会の人々など、様々な人に登場してもらおう予定です。

2月の主な活動

13日 今立グリーン・ツーリズム推進協議会講演会参加：講師 結城登美雄氏

16日 連続講座ひろば第1回開催、話者：増田頼保

24日 秋葉山神社火祭りに参加

26日 今立食と農のつどい 講演会、懇親会に参加：講師 金丸弘美氏

27日 今立町食と農のつどい パネル展示に参加



連続講演会「ひろば」の様子



秋葉山神社の火祭り

グリーン・ツーリズムあれこれ

今、日本全国でグリーン・ツーリズムが注目されています。グリーン・ツーリズムとは曖昧な表現で、人によって様々な意味合いをもちます。またグリーン・ツーリズムの利点とは何かとう点についても人によって様々でしょう。おおまかには、グリーン・ツーリズムの利点は社会的利点と、経済的利点に分けることができるでしょう。社会的利点とは、外(街)の人との交流が活発化することによって農村に新しい機運が生まれ、地域の人々が生きがいを見出し、逆に街の人々が農村を理解することによって、双方向の理解が生まれることであるといえます。経済的側面とは、グリーン・ツーリズムにともなう経済活動によって、新しい収入源や雇用が創出されることです。

森のエネルギーフォーラムでは、今のところ主に社会的利点に注目しています。NPO団体は、経済活動よりも、社会活動を得意とし、これまでにない社会活動を活性化することによって、地域振興をはかることができるからです。また私自身は、森のエネルギーフォーラムが仲介者となり、急激な変化というよりも、ゆっくりでもいいから街と農村を結ぶような着実なグリーン・ツーリズムを目指しています。

3月の活動報告

NPO 法人 森のエネルギーフォーラム
石山俊

1年間を振り返って

森のエネルギーフォーラムが今立町から委託を受けて始まった、地域資源調査は3月をもって終了します。すでにその報告書を3月22日に町に対して提出しました。

この調査の最終的な目的は、「グリーン・ツーリズム」という新しい形態の地域振興策を実現させるためのものです。したがって、報告書を提出したからといってすべてが終わりというわけではありません。

本日、八ツ杉森林学習センター主催で、「野草の見つけ方と料理」、「野菜づくり入門」というテーマのイベントが、南坂下を舞台としておこなわれました。福井市、鯖江、武生など近隣から参加者がほとんどでしたが皆、野菜づくり、田舎暮らしの少なからぬ関心をもっている人々でした。

こうした人々と南坂下区、月尾谷の人々とのかかわりあいをどのように構築していけるか、この調査事業にかかわったNPO、八ツ杉森林学習センター、グリーン・ツーリズム推進協議会の来年度の課題です。

森のエネルギーフォーラムでは、来年度に「地域を感じ、世界を知るエコロジー体験講座」事業を企画しています。この企画は、NPOが引き続きお借りする田の作業を経験し、世界の田舎暮らしを知ろうというものです。こうした講座に南坂下の人々が遊びに来ていただけるように、定会等において事前通知をするようにしますので、来年度も引き続きご理解、ご協力の程よろしくお願いいたします。「地域を感じ、世界を知るエコロジー体験講座」の第1回は、5月7日、8日に田植をする予定です。

3月の主な活動

3日 連続講演会「ひろば」第2回開催、話題提供者：杉村和彦氏「共に食べることの原像」

16～17日 アフリカ、モラルエコノミー研究会開催への協力

23日 連続講演会「ひろば」第3回開催、話題提供者：石山俊「私のアフリカ暮らし、今立暮らし-日々の生活からみえてきたこと-」

27日 八ツ杉森林学習センター主催、「エンジョイ田舎暮らし」への参加

資料 2

説明：南坂下区定会で配布した地域資源調査月間報告(2004年5月～2005年2月)

本調査は、「調査のための一方的な情報収集」ではなく、区の人々に調査経過を報告・還元しながら進めていく方法をとった。本資料は、毎月27日におこなわれる定会で、簡単な調査報告、および森のエネルギーフォーラムの活動報告をした際に提出したものである。

資料2

生活編：調査者は調査対象集落の空家に住み、調査を続けてきた。調査者の生活そのものがグリーン・ツーリズムの極相である農村への定住のひとつのモデルとなりうる。空民家の活用事例となりうる。



屋根裏部屋を改装して居室に



完成後の姿



薪ストーブは農村暮らしの新しいシンボル



薪ストーブ生活のための薪割



空家の活用例、学術研究会の開催

地域資源編：グリーン・ツーリズムに活用可能な地域資源



こごみもち、沢庵、サトイモに田舎料理



いろいろで焼くモチも重要な地域資源



祭礼行事：秋祭りのしし返し

祭礼行事：火祭り(2月)



南坂下の集落景観



南坂下の農地景観

アクションリサーチ編



アクションリサーチのために借りた
田んぼでの田植風景



森のエネルギーフォーラムの特色を活かした田
植。木炭田植機。



昔ながらの方法で稲刈りをする



南坂下の人に教えてもらってつるし柿
づくり



調査の一環としての古民家コンサート



南坂下、端政寺でコンサート

資料 3

説明：平成 17 年度の活動予定

資料 3 - 1 地域を感じ、世界を考えるエコロジー体験講座事業

資料 3 - 2 地域を感じ、世界を考えるエコロジー体験講座チラシ

はじめに

本プログラムは、青少年を対象にして、農村体験と世界の暮らしぶりを学ぶことを組み合わせた事業です。

森のエネルギーフォーラムの調査・研究員として、私が南坂下を中心とした月尾谷の地域資源調査を始めからもうすぐ1年がたとうとしています。昨年の夏以降、実際に南坂下に住んで農作業や区の行事などの様々な体験をしながら調査を進めてきました。

農作業をしながら、人々の話を聞きながら来年度の事業計画を練っているうちに、子供を対象にした農作業体験はなんとか実現できそうな気がしていました。それに世界の自然利用を理解する講座を組み合わせたのは、申請書作成に苦しみながら半ば思いつきであったのです。

その計画がはからずとも日本たばこ産業からの助成を受ける可能性が濃厚になりました。この事業は、森のエネルギーフォーラムの活動蓄積、個性的なメンバー構成、地域資源調査を生かした、いわば今までの活動を凝縮したものであるといえます。

目的（申請書より）

現代社会では、不登校やひきこもりといった青少年に関する問題が湧出している。その背景には様々な問題が指摘されているが、その根底には現代社会において、生きる喜びや実感、人間はどのようにして生命を維持しているかという認識の欠如をあげることができよう。当団体は2004年度より、芸術・創作活動を軸としたこどもアートセミナーを開催し、芸術活動を通じて生きることを表現することの大切さを理解するためのプログラムにとりくみはじめた。本企画はもうひとつの問題、つまり青少年に生きることを意味を、自然環境を巧みに利用した山里での生活体験のなかからソフトに問いかけることを目的とする。そして山里での体験のみではなく、その体験を元にして世界の自然と共存し生きている人々に対する理解を深め、将来の地球規模の諸問題を考えることができる青少年の育成を目指す。

対象

小学校高学年から高校生およびその父兄等

スケジュール

2005年5月初旬 田植、アフリカの生活1

南坂下地区で借りた田の田植をしながら、協働する講師によってアフリカの生活について知識を深める

2006年6月下旬 草取り、アフリカの生活2

田の雑草とりをしながら、協働する講師によってアフリカの日常生活について知識を深める

2005 年 7 月下旬 水場探し、山里の昔の生活 1

南坂下地区には、飲用可能な湧き水が数箇所あり、それらを探しながら南坂下の生活について地元の老人に話を聞く

2005 年 8 月下旬 田の手入れ、アジアの生活 1

田の水管理や、稲刈りの準備をしながらアジアの稲作世界について知識を深める

2005 年 9 月中旬 稲刈り、アジアの生活 2

稲刈りをしながら、日本の山里の知恵を学び、アジアの稲作と比較する

2005 年 9 月下旬 収穫祭、ヨーロッパの生活 1

収穫した稲を食べながら、米食文化のアジアと粉食文化のヨーロッパの違いについて知識を深める

2005 年 11 月中旬 つるし柿づくり、ヨーロッパの生活 2

南坂下になっている渋柿でつるし柿をつくりながら、ヨーロッパの保存食について知識を深める

2005 年 12 月中旬 保存食づくり、山里の昔の生活 2

南坂下でとれた大根等から冬の保存食をつくり、他の保存食について知識を深める

2006 年 2 月中旬 つるし柿、保存食の試食

これまで作った、農作物や保存食を食べながら 1 年間の山里の生活について総括する

実施方法

本事業は青少年を対象にした当会のひとつの独立した事業であるが、実施にあたっては平成 16 年度からはじめた会員による農作業等と組み合わせて運動させていく。今立・匠・ロングステイプロジェクトともリンクさせていく。

事業の実施にあたっては、関係諸機関と連携し、できるかぎり共催団体として参加してもらう。その際、当会会員、共催団体会員の参加費は一般参加者よりも安価にする。

講師は当会会員、その知人、南坂下地区の人に依頼する。

なお詳細な企画は、参加者の意見を聞きながら改善を重ねていく。

地域を感じ、世界を考えるエコロジー体験講座

地域を感じ、世界を考えるって？

この体験講座では、農作業や保存食などといった、食を通して、季節を感じながら、山里の自然・生活を体験します。これだけでも、味わい深いおもしろい講座。でもそれだけでは少しもの足りない？この講座にはそこに、豊富な海外経験をもった芸術家や研究者等が参加してくれます。アフリカの生活はどうだろう？東南アジアの人はどんなものを食べているのだろうか？ヨーロッパの保存食はどうだろう？日本の暮らしが世界の多様な文化の語りの中で色鮮やかによみがえってきます。

地域を感じ、世界を考える。世界を感じるから地域を考える。この体験講座を通じて遊び楽しみながら福井発の新しいスローライフをつくってゆきたいと思っています。

講座の主な対象者は小学校高学年から高校生くらいですが、もちろん大人も参加可能です。ただ今、大人向けの別プログラム(天然酵母パンづくり)なども検討中です。

日程(天候・作物の生育状況によって変更する可能性があります)

2005年5月8日 田植、アフリカの生活 1

田植をしながら、協働する講師によってアフリカの生活について知識を深める

2006年6月26日 草取り、アフリカの生活 2

田の雑草とりをしながら、協働する講師によってアフリカの日常生活について知識を深める

2005年7月31日 水場探し、山里の昔の生活 1

おいしい湧き水を探しながら南坂下の生活について地元の人に話を聞く

2005年8月28日 田の手入れ、アジアの生活 1

田の水管理や、稲刈りの準備をしながらアジアの稲作世界について知識を深める

2005年9月18日 稲刈り、アジアの生活 2

収穫したお米を食べながら、米食文化のアジアと粉食文化のヨーロッパの違いについて知識を深める

2005年11月13日 つるし柿づくり、ヨーロッパの生活

つるし柿をつくりながら、ヨーロッパの保存食について知識を深める

2005年12月18日 保存食づくり、山里の昔の生活 2

大根等から冬の保存食をつくり、他の保存食について知識を深める

2006年2月5日 つるし柿、保存食の試食

農作物や保存食を食べながら1年間の山里の生活についてふりかえる

対象：小学校高学年～高校生ですが、特に厳密な条件は設けません。老若男女が参加可能です。

募集人員：10名程度(ただしこれはあくまでも目安ですので多くても少なくても開催します)

参加費：1回2000円程度(日帰り、現地集合現地解散、昼食込み)、1年連続参加の場合は割引を検討中

森のエネルギーフォーラム会員家族は割引あり

開催地：今立町南坂下区



主催：NPO法人 森のエネルギーフォーラム <http://laputa.fpu.ac.jp/mori>

共催：ハツ杉森林学習センター、今立古民家匠ロングステイ実行委員会

問い合わせ先：0778 - 42 - 3611、lacthad@hotmail.com 石山まで

報告 2

地域資源の情報発信の方法、及び今立の地域資源発信ターゲットとしての
若年層、特にスロー/クラフト系クラスタについての調査レポート

(特)森のエネルギーフォーラム
調査・研究員 淵上 周平

地域資源の情報発信の方法、及び今立の地域資源発信ターゲットとしての若年層、特にスロー/クラフト系クラスタについての調査レポート

淵上周平

概要

地域の時代が叫ばれて久しいが、都心と地方・地域間における、経済及び情報の差異の是正はまだまだこれからといった部分が多い。

1章では、この差異を「非対称性」というタームで捉えなおし、この非対称を対称に戻していく運動として、地域活性を目的とした情報発信の方法を調査・考察する。「どのような方法によって」という問いに対応する第1章は、特にインターネットによる発信が、インターネットのシステム自体が持つ対称性という特性により、地域活性に最も適当なメディアであると考え、最新の技術とサービスを詳しく精査し、可能性を探る。

また、地域情報の発信を調査する過程で、今立のリソースを発信する最も効果的なターゲットとして、2つの層が浮かび上がってきた。一つはリタイア後/リタイアを控えた団塊世代、俗にシルバー世代と呼ばれる層。そしてもう一つが、若年層、特にスロー/クラフト系クラスと呼べる層である。2章では、ターゲットとなりうる2層へのアンケート調査とインタビュー、及びターゲットに近い媒体の分析を行い、今立町の地域資源との接続可能性を考察する。

目次

1章 地域資源の情報発信の方法

1-1 はじめに

1-2 紙媒体を活用した地域情報の発信

1-2-1 事例紹介：G-NET

1-2-2 まとめ

1-3 インターネットを活用した地域情報の発信

1-3-1 地域情報発信ウェブサイトにおける問題点

1-3-2 ウェブログ(ブログ)による情報発信

1-3-2-1 事例紹介：eコミュニティしまだ

1-3-3 ソーシャルネットワーク(SNS)による情報発信

1-3-3-1 事例紹介：ソーシャル・ネットワーキングサイト[ミクシィ]

1-3-4 その他の可能性：コミュニティ通貨

1-4 まとめ：情報発信の内容と方法について

2章 スロー/クラフト系クラスタの関心

2-1 はじめに

2-2 スロー系、及びクラフト系ターゲット層について

2-2-1 ユーザーインタビュー（若年層スロー/クラフト系クラスタ）

2-2-2 ユーザーアンケート調査（団塊の世代への聞き取り調査）

2-2-3 媒体分析

2-2-3-1 "Ku:nel"

2-2-3-2 "Arne"

まとめ：スロー/クラフト系ムーブメントの内容と今立地域資源との接続可能性

1章 地域資源の情報発信の方法

1-1 はじめに

現代世界の様々な問題は、非対称性と対称性、というタームで考えると、ある展望が開いてくる(1)。

世界的な規模で言えば、南北の経済格差は文字通り経済の非対称性が南北に当てはめられている例である。持つもの-持たないもの、主人-奴隷と同様の断絶・非対称性が、経済的に生み出され、それが持続していくように機能してしまっている。

この問題意識を経済学で展開したジョセフ・スティグリッツは、「情報の非対称性から来るグローバリズムの拡大」と表現している(2)

また、地球環境の問題も同様に、人間と自然の関係が、主人としての人間と、人間にとって有用なりソースとして操作・開発される対象である自然、という非対称な関係として進行してしまった問題として理解することができる。

都市と地域の関係も同様に、なかば強いられ、また自ら選んできたとも言える非対称な関係である。中央への経済的依存(助成金・仕事の受注など)、マスメディアという「中心」からの情報によって画一化された文化など、中心としての都市があり、そこに従属、または一方的な影響を受ける地域、という非対称な関係が存在している。

地域の経済発展・及び文化的な成熟を、この非対称性の解消、つまり地域それぞれが自律し、主体となること、と考えた場合、我々の課題は「非対称な関係から対称的な関係への移行」と言うことができるのではないか。地域経済と文化の発展は、中央からの一方的な情報や助成の授受によって実現するのではなく、地域独自の文化や考え方に立脚した、自律・自立型の仕組みと繋がりによって実現していくことが望ましい。

また、非対称から対称へ、という問題意識のなかで行われる地域活性にとって、NPO という組織形態は、非対称な関係から一定の距離を置くことが可能な組織になりうる強いツールであると思われる。官への依存、そして経済原理への従属から離れた実践が可能である NPO は、脱-非対称運動としての地域にとって大きな役割を果たすことができる。そのための経済的な仕組みや産業については他稿に譲るとして、本稿では、地域独自の情報発信の現状や可能性を調査する。

(1) ブルノ・ラトゥール著『科学が作られているとき --- 人類学的考察』川崎勝、高田紀代志訳(産業図書)等を参照

(2) ジョセフ・E・スティグリッツ著、『人間が幸福になる経済とは何か』、鈴木主税訳、徳間書店、

1-2 紙媒体を活用した地域情報の発信

紙媒体は、地域が活用できるメディアの中でも、インターネットと並んで利用価値が高い。メリットとデメリットは以下の通りである。

メリット：

1. 従来からあるメディアであり、発信側にとっても運用ノウハウやインフラ（印刷設備や配送システム）が整備されていること
2. 同様に、ユーザ・利用側にとっても、特に設備の必要がなく、親しみやすい
3. 特に今立町は紙についてのリソースが豊富であること

デメリット：

1. 一定の運用コスト（編集・印刷・配布）が発生すること
2. インターネットなどに比べ、発信が一方的であること
3. 表現の限定（音声や動画などは配置できない）

上記のような特徴を持つメディア、紙媒体を利用して、地域活性を行っている事例を紹介する。

1-2-1

事例紹介 1 : G-NET

- ・特定非営利活動法人 G-net によるフリーペーパー「ORGAN」の発行

地域：岐阜県

代表者：代表理事 秋元祥治

住所：〒500-8875 岐阜県岐阜市柳ヶ瀬通 2 丁目 1 番地 ベルビル 2 階

URL：http://www.gifist.net/

メール：info@gifist.net

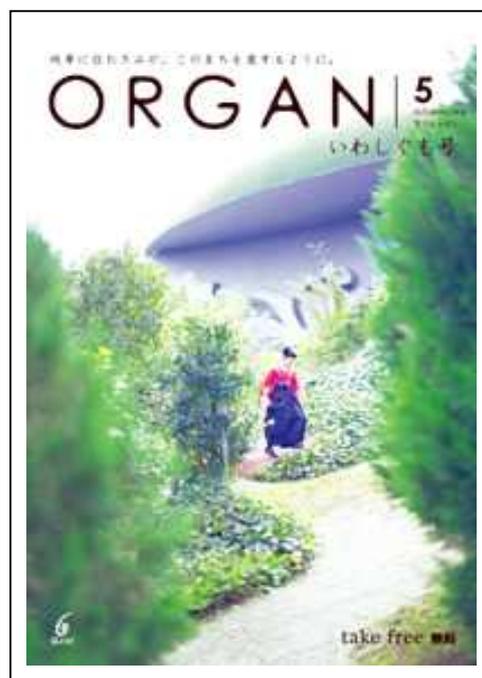
G-NET について

特定非営利活動法人 G-net は、「岐阜を切り口にして新たな世の中像を提案する」という目標を掲げ、起業家的・創造的人材を育成し、育った人材に根ざしたまちづくりのモデルを岐阜の街から確立・発信している。代表の秋元祥治氏(25 歳)を中心に、学生はもちろん、雑誌編集者や都市プランナー、起業家からサラリーマンなど、20代を中心に、岐阜地区に40名程度・東京地区に10名程度が活動にコミット。地域に密着した事業型 NPO を目指している。

事業の中心として、学生が、在学中に社会へ出て仕事を数週間体験できるインターンプログラムを行い、地元企業に対し地元の学生を派遣し、両者にとって地元意識を育み、かつ学生に対して起業意識を促すことを目的としている。

G-NET が発行するフリーペーパー「ORGAN」は、岐阜市内を中心に約 300 ヶ所のカフェ・レストラン・ショップ・ヘアサロンなどに配本されている。内容は、岐阜に関連するトピックを中心に、町おこしや仕事の作り方など、社会的な実践をテーマにした内容が多い。以下最新号(いわしぐも号)の目次である。

<「ORGAN」いわしぐも号>



主な内容

- ・ ORGAN 小旅行 Amelie in WonderGarden (養老天命反天地)
- ・ きもののすすめ 「和食は、箸に始まり箸に終わる」編
- ・ ORGAN 進路指導室 早川ひろみ (ライター)
- ・ カクメイのその先に その1 経済産業省 前審議官 古田はじめ × 秋元祥治
- ・ カクメイのその先に その2 漫画家 山田貴敏 × 秋元祥治

<インタビュー：フリーペーパーによる地域コミュニティ情報発信について>

地域情報の発信について、G-NET 事務局に対して、メールインタビューを行った。(編集・文責 淵上)：

--G-net にとってフリーペーパー『ORGAN』がどういう機能を果たしていると思いますか？

G-net の活動や理念を直接若年層に伝えることが可能なメディアが地域内になく、ダイレクトリーチ可能なメディアを持つ必要性から始めました。夢に向かって挑戦するカッコいい岐阜でのライフスタイルを提案し、「岐阜なんて何も無い田舎やて」という地域へのあきらめに対して「こんなカッコいいヒトがいる、こんなオシャレなモノがある」という情報を発信することで、夢に挑戦する生き方を提案し、地域に対する愛着や誇りを若年層に生み出したいとの思いも込めています。

---『ORGAN』からイベントやインターンなど若者の挑戦への繋がりを教えてください。

夢に向かって挑戦をする、岐阜での起業家的なライフスタイルを誌面を通じて読者にカッコよく提案し、「なりたい自分になる」具体的な方法論としてイベントスタッフへの参加や、ホンキ系インターンなどの挑戦の機会を紹介します。セミナーや説明会などステップを読者に提示して、参加を促進します。

1-2-2

まとめ

上記取材から、紙媒体を活用した地域情報の発信には、さらにもう一つのメリットがあることがわかった。「地域内でのコミュニティ強化」である。

今立町に関連するところでは、福井県和紙工業協同組合によるフリーペーパー「和紙だより」の発行・配布が行われている。今立の地域特性をうまく活かした媒体であり、和紙に関心のある人にとっては重要リソースの一つとして確固たる地位を築いている。この媒体を例えば、今立の内部コミュニティでより積極的に活用する、という展開が考えられる。媒体分析を踏まえたチャプターのまとめとして、「和紙だより」、あるいは今立から発信・発行する新たな紙媒体において、以下のような展開が期待できる。

1. 若年層の参加促進
2. 地域外の人間だけでなく、内部の人間もターゲットとするようなコンテンツ。

1. については、編集委員の中に若手のスタッフを入れたり、NPO や学校と共同で外部の若者と編集を行うなどで、対応が可能と思われる。また、2. について、「和紙雑誌」誌媒体の展開を考えた場合、紙業界内部だけでなく(1)、地域住民との何らかのコラボレーションを行うことで、より効果的な紙媒体になると思われる。

(1) 「和紙だより」では、コンテンツの一つとして、和紙業界の外部のデザイナーや事業者にインタビューを行うコーナーがあり、この問題意識を保持している。

1-3

インターネットを活用した地域情報の発信

インターネットによる地域情報の発信は、二重の意味で本質的な情報発信である。インターネットは、もともとアメリカが軍事目的で開発し、その後研究者を中心に発展したコンピュータネットワークであるが、その設計のコンセプトは、「情報の保存と発信を分散化し、中央が攻撃された場合のリスクを小さくする」というものである。

このネットワーク上では、どのポイント（ネットワークの用語では“ノード”）も、発信者であり受信者である、という状態が実現されることになった。その後ネットワークは大学の研究者から徐々に一般に広がり、現在のインターネット(www:ワールド・ワイド・ウェブ)が実現した。この「全てのノードが発信者であり受信者である」というコンセプトは、言い換えれば「全てのノードが中心である」ということであり、本稿のテーマである「情報の非対称性を対称にする動き」にとって、重要な仕組みであることが分かる。

現実には、これまでの非対称メディア、特にテレビなどのマスメディアが、本来対称であるネットワークを、非対称的に利用する動きは当然進行しており（テレビ的な配信モデルの発展、及び著作権の過剰な強化による情報の非対称性の確保など）、インターネット内に非対称性が存在することは事実である。しかし、地域活性のための情報発信をテーマとする本稿にとっては、対称的なメディアとしてのインターネットにフォーカスし、その最新の事例や技術を分析し、地域情報発信への適用を考察する。

1-3-1

地域情報発信ウェブサイトにおける課題

現在、様々な地域から、インターネット上のウェブサイトを通じて情報発信が行われているが、地域間においても、発信が成功しているところとそうは言い難いところの格差が広がっている。原因として考えられるのは主に、

- ・担当者のウェブに対する知識の格差
- ・ウェブサイトの構築/運営コストの捻出

の2つである。項1については、外部業者への委託などによってクリアできるが、そのためにも項2の予算の問題が大きい。

ウェブサイト構築予算の現状

インターネットが普及しはじめた当初は、ウェブサイト制作にかかる費用（業者の出す見積もり）はまだ基準が定まっておらず、各制作者が独自の値段体系で作業を行っていたが、現在は、多少の上下はあるものの、基本的な平均見積もりが定まりつつあると見てよい。

おおよその数値は以下(1)。

- ・企画構成費：10-50万円（ページ全体で30枚程度の場合）
- ・トップページ作成：3-10万円
- ・中ページ作成：1-5万円/ページ
 - *画像制作、テキストライティング込み。
- ・進行管理費：全体の10-20パーセント

企業のウェブサイト制作の費用は、現状このあたりが基準になっている。しかし、地域活性を目的とした地方自治体で、この金額を捻出できる予算を確保しているところはあまり多くないと思われる。そのような状況の中で、

- ・構築と運営の費用が小さく
- ・担当者レベルでも更新が可能であるレベルの扱いやすいシステムで、
- ・ウェブ上での情報の流通に適しているシステム

として注目されているのがウェブログ（ブログ）と呼ばれている仕組みである。

(1) 業者ヒアリング、及び

<http://allabout.co.jp/career/freelance/closeup/CU20011017A/index.htm> などを参考。

1-3-2

ウェブログ(ブログ)による情報発信

ウェブログとは、一言で説明すると「ウェブサイトを簡易に更新するシステムの総称」である。インターネットは、研究者の手を離れて一般の人が利用するようになってから、個人及び法人の情報発信ツールとして発展を遂げてきたが、ウェブログ以前は、専門的な知識を要する敷居の高い作業であった。しかし、専門的な知識を必要とする部分をコンピュータに任せて、人間は内容(コンテンツ)の作成に集中できるようなシステムが、インターネットの普及と共に求められるようになり、その結果ウェブログと呼ばれるシステムが生まれてきた。大きな特徴としては、

- 1 専門的な知識無しに、簡単にウェブサイトを構築・更新することができる
- 2 ウェブログ同士の横の繋がりが発生しやすいようなシステム設計

の2つが上げられる。

ウェブログの特徴1：更新の容易さ

ウェブログの更新の容易さは、それ以前のウェブ制作と比較すると圧倒的である。以前は、HTMLと呼ばれるコンピュータが読むことのできる言語を記述するか、またはウェブサイト制作用のアプリケーション(マクロメディア社のドリームウィーバーやマイクロソフト社のホームページビルダーなど)でサイトをデザインし、そのデータをサーバにアップロードする、という作業を行っていた。しかし、ウェブログは、普段ウェブサイトを閲覧しているときに利用するブラウザ(マイクロソフト社のインターネットエクスプローラなど)で、ウェブログサイトの編集画面にアクセスし、そこで掲示板に書き込みをするようにして、更新したいコンテンツを執筆・編集するだけで、更新することができる。

現在は、メールを指定のメールアドレスに送ることで、自動的にウェブサイトが更新される仕組み(「モブログ」と呼ばれている)などもブログサービスとして提供されており、情報発信者はより、コンテンツの作成に専念することができるようになっている。地域による情報発信の課題として、ウェブに対する知識の格差、という点を指摘したが、ウェブログによってこの問題はほとんどクリアされると言って良い。

ウェブログの特徴2：他のウェブサイトとの繋がりやすさ

他のウェブサイトとの繋がりやすさ、というウェブログの特徴は、いくつかのポイントから説明できる。

1つめは、ウェブログで作成されているウェブサイトのHTMLが、検索エンジンなどのロボット/コンピュータにとって理解しやすい言語である、というポイントである。コンピュータの領域はコンピュータに任せ、人間は人間に向けたコンテンツ部分にのみ能力を集中する、というウェブログの思想に忠実なこの特徴から、ウェブログサイトは検索エンジンでの評価が高く、その結果ユーザとの距離が縮まっている。

2つめは、ウェブログの執筆スタイルから来る繋がりやすさである。もともと日記ツールの利用で広まってきたウェブログの特徴は、「ニュースや他の人の書いた記事を引用して、自分のブログで展開する」という執筆スタイルである。

あるニュースに対して、いろいろな人が自分のブログで紹介し、自分の考えを付け足す。このスタイルによって、これまでのマスメディア型のニュースの広がりとは違った、草の根的なネットワークが広がることになったのが、現在のウェブログの世界であるが、地域の情報発信をテーマとする本稿にとって重要なのは、興味深い情報、新しいネタを提供するウェブサイトは、多方面からリンクが集まる、というポイントである。

次に、ウェブログを効果的に活用した地域の情報発信を見ていく。

1-3-2-1

ウェブログ(ブログ)による情報発信

事例紹介：e コミュニティしまだ

<http://www.community-platform.jp/portal/>



<トップページイメージ>



<参加グループ「子ども宝物マップ」のページ>

<概要>

- ・地域の人々、NPO、地域の企業、島田市役所、慶應義塾大学、静岡大学、独立行政法人防災科学技術研究所など多様な背景を持った人々が協力する「eコミュニティしまだ研究会」が運営
- ・島田市を中心とする地域が「どんなところなのか」知ることのできる情報を、参加グループ(「セル」と呼ばれている)がそれぞれ更新
- ・参加したい市民がサイト上で「応募・投稿」し、承認を経てコンテンツ提供者となる
- ・セル同士の交流を行うためのフォーラムにおいて、議論や意見交換などを行っている
- ・ウェブログツールの1つである"Xoops"を活用

効果的な活用

前述した2つのポイント

1 専門的な知識無しに、簡単にウェブサイトを構築・更新することができる

2 ウェブログ同士の横の繋がりが発生しやすいようなシステム設計

を軸に内容と運営を考察する。

まず1つめの更新の容易さについて。概要で指摘した通り、「eコミュニティしまだ」では、島田地域に関連するトピックの更新を、セルと呼ばれる数人のグループによる自発的な更新によって実現している。Xoops というシステムを利用し、各セルがそれぞれのウェブログを開設・運営することができるような仕組みになっている。更新が容易なウェブログをうまく使い、市民が自らウェブサイトを更新し、市民のネットワークと低コストなコンテンツ作成の両方を実現している。

2つめの横のつながりについては、「eコミュニティしまだ」内に複数のウェブログが「入居」していることがポイントであろう。各グループ(セル)のウェブログの内容が、トップページ上に通知される仕組みになっており、コミュニティの形成に貢献している。

<各サイトの更新状況の通知イメージ>



まとめ

以上の分析から、地域情報の発信において、ウェブログの利用は選択肢の一つとして適していることが推測できる。特に NPO のように、参加者の自発的な参加を大きな原動力とし、大きな予算を持たない組織にとっては、ウェブログの、簡単さ（低コスト）と繋がりやすさ（ネットワーク形成のしやすさ）は大きな武器となる。

ウェブログを通じた情報発信は、他地域との交流、そして内部コミュニティでのコミュニケーション促進という2つの意味で有効である。

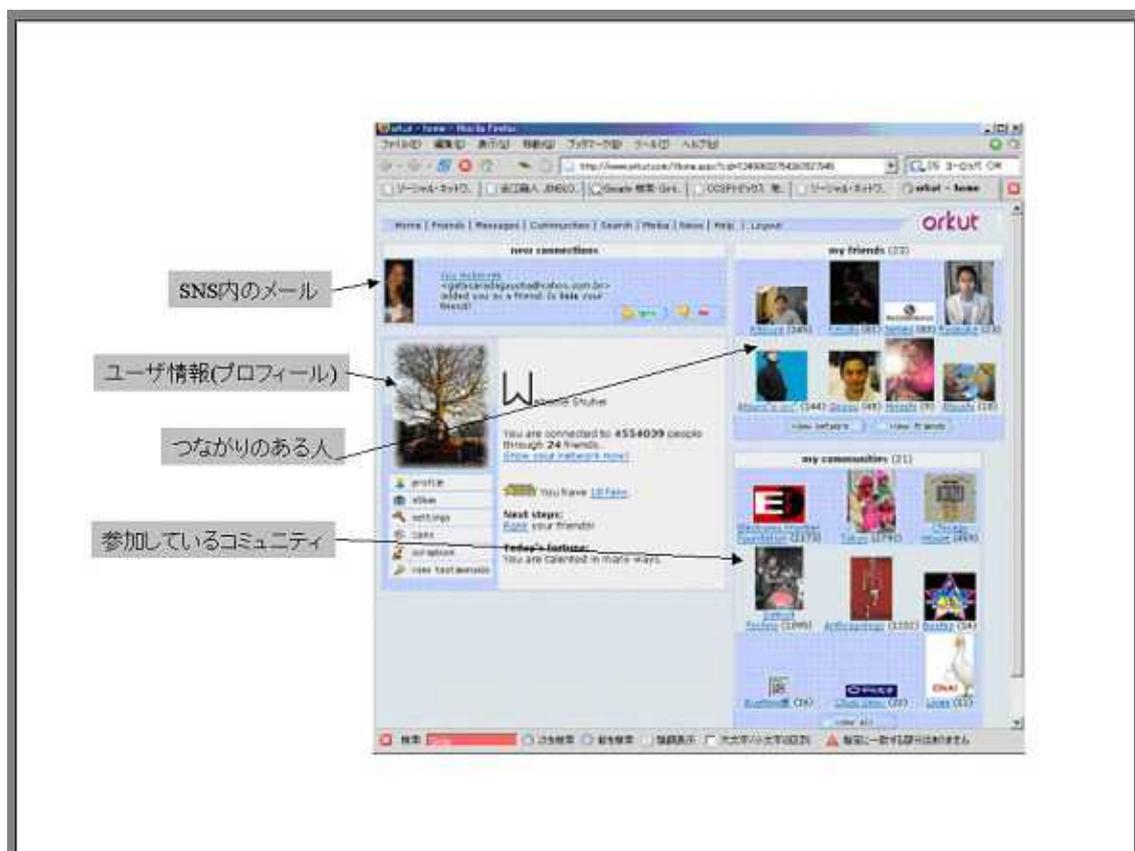
1-3-3

ソーシャルネットワーク(SNS)による地域情報の発信

ソーシャルネットワークサービス(SNS)とは、ウェブログの出現以降に出てきた一種のコミュニティサービス。知人からの紹介によってサービスに参加できる、という仕組みが一般的であり、友達との関係を確認し、深め、交流をより親密化・広範囲化してだけでなく、友達の友達、その友達..と綿々と連なるネットワークや情報源への入口となるサービスとして利用者が増加している。

ウェブログよりも密なコミュニティ形成が可能であり、また招待制によるフィルタリングの結果、通常のコミュニティサイトよりも良質のコミュニティが形成可能であり、若年層を中心に様々な地域のコミュニティが生まれつつあるため、本稿の考察の対象とした。

SNSの特徴



<代表的な SNS である "Orkut" のイメージ : (<http://orkut.com>)>

- ・ ユーザ情報：プロフィール、趣味、所属、日記などの情報
- ・ つながりのある人：知人のネットワーク情報
- ・ 参加コミュニティ：様々なジャンルのコミュニティをユーザが作成し、情報の共有などを行っている。
- ・ メール：SNS内でのメール送受信

SNS の利用について

上記の orkut はアメリカを中心としたサービスだが、日本で最も会員数の多いサービスは、MIXI(ミクシィ)である。会員数は2005年1月現在で40万人を超え(*1)、現在も拡大中であり、日本で最も盛り上がっているコミュニティサイトの一つである。

本稿の調査のため、2004年11月に『今立コミュニティ』を設立し、コミュニティ内での情報共有の経過を見た。



<今立コミュニティ@mixi.jp>

- ・ 会員数：14名(2005年3月1日現在)
- ・ 会員平均年齢：詳細は不明だが20代前半が多数

コミュニティ内でのコミュニケーションとしては、雑談、イベントの告知が主なトピックである。コミュニティ内でトピック(議題)を立てることができるが、その内容として上がっているのは、「メンバーが少ない」「来年の10月1日から(合併して越前市になるという話題)」「よろしければ管理交代いたします。」(淵上から今立在住の人へ管理人を交代したトピック)の3つ。Mixi内のコミュニティは、関係者による閲覧が主であるため、関係者の人数が少ない場合は盛り上がり欠ける。地域名でコミュニティを作成しても、地域に関係のある人しか参加しないため、関連のあるトピックで地域情報を発信する。

(*1)イー・マーキュリーのSNS『mixi(ミクシィ)』、ユーザ数が30万人を突破 ~
<http://www.emercury.co.jp/press/050121.html>

1-3-4

その他の可能性：コミュニティ通貨

地域情報の発信方法の可能性として、コミュニティ通貨（地域通貨）を取り上げる。コミュニティ通貨は、その名の通り地域内で流通する通貨であり、全世界の地域コミュニティにおいて、重要な活性化ツールとして、様々な地域で運用が模索されている。詳細な分析は他の論考に譲り（*1）、ここではメディアとしてのコミュニティ通貨（地域通貨という名称に、地域を横断して繋がっていくという意味も込め、「コミュニティ通貨」という名称を使用する）というテーマに触れておきたい。

地域通貨は、1929年の世界大恐慌で激増した失業と生活の困窮を解決するため、法定通貨と併行しながら、地域で流通し、通常の利子とは逆である、時間とともに目減りさせる利子を採用することで、貨幣の循環が速まる交換媒体として発案したのが始まりだという。記録によれば、ドイツ、アメリカ、スイス、デンマーク、オーストリアなどで各地域ごとに趣向をこらした試みが行なわれ、一部は現在まで続いている。

1920年代は、帝国主義という名の非対称経済の拡大が全面化し、その帰結として世界恐慌そして第二次大戦に繋がっていく時期であり、現在私たちの地域経済・地域文化にも大きな影響を及ぼしている「グローバリズム」の重要な成長期である。利子が付くことなく、逆に目減りしていく仕組みを人々が作ったのは、貨幣の蓄積を回避するためであり、貨幣の蓄積が生み出す不均衡・非対称の構造を回避するためであるといっている。

現在、コミュニティ通貨が盛んに使われるようになったという事実も、地域経済や地域文化が、法廷貨幣を軸にした中央への依存関係やグローバリズムの圧倒的な影響を受け、現状のままでは自律した独自の経済・文化を形成できなくなってきたという現実に対応して生まれてきたものである。

（*1）『地域通貨』嵯峨生馬著、NHK新書(2003年)など参照

メディアとしてのコミュニティ通貨

地域通貨は、一見するとメディアではなくシステムのように見える。しかし、日本総研研究員嵯峨氏によると、「コミュニティ・メディアとしての地域通貨」という視点が可能である。前述したウェブログの効果としてあげた2つ「コミュニティ外への発信」及び「コミュニティ内でのコミュニケーション促進」のポイントは、そのまま地域通貨にも当てはまるように思われる。後者については、そもそもコミュニティ通貨の目的であるため説明を割愛し、前者について考えてみたい。

メッセージとしてのメディア

「メディアはメッセージである」とは、メディア論の先駆けであるマーシャルマクルーハンの言葉だが、コミュニティ通貨はまず、メッセージとして機能している。各地域で使われているコミュニティ通貨の名称をいくつか挙げてみよう。

- ・帯広市 / サラダ (帯広市役所農林課)
帯広の森市民農園での利用
- ・置戸町ほか / 銀河線応援債 (置戸町商工会)
ふるさと銀河線存続のための減価型地域通貨
- ・遠野市 / カッパ (NPO法人遠野山・里・暮らしネットワーク)
農作業に対し農作物と交換する仕組み。
- ・水戸市 / 輪 = リング (NPO法人和嬉 = やわらぎ)
群馬町 / しるく・繭券 (NPO法人じゃんけんぽん・地域元気マネーしるく委員会)
- ・小川町 / FOODO <ふうど> (小川町農業後継者の会 = わだち会・NPO法人ふうど)
柏市 / エッグ (「柏・にわとりの会」地域通貨エッグ管理事務局)
- ・金沢市大野地区 / もろみ (くらくらアートプロジェクト) 参考
醤油醸造用もろみ蔵をギャラリーに改造する協力者のため
- ・忍野村 / ECHO <エコー> (浄土真宗祭頭山慧光寺)
浄土真宗のお寺が通帳型の自主通貨として発行
- ・福岡市博多区 / よかよか (奈良屋まちづくり協議会・地域通貨よかよか実行委員会)
- ・別府市 / 湯路 <ゆーろ> (別府八湯竹瓦倶楽部 / 発行元 = いー湯ー <EU>)

通貨の名前に、そのコミュニティのメッセージが表現されていることがよく分かる。外へのアナウンスという機能と同時に、コミュニティ通貨という仕組み・考え方に賛同する、というメッセージも込められている。この意味で、コミュニティ通貨はメディアとしての機能を果たしていると言える。

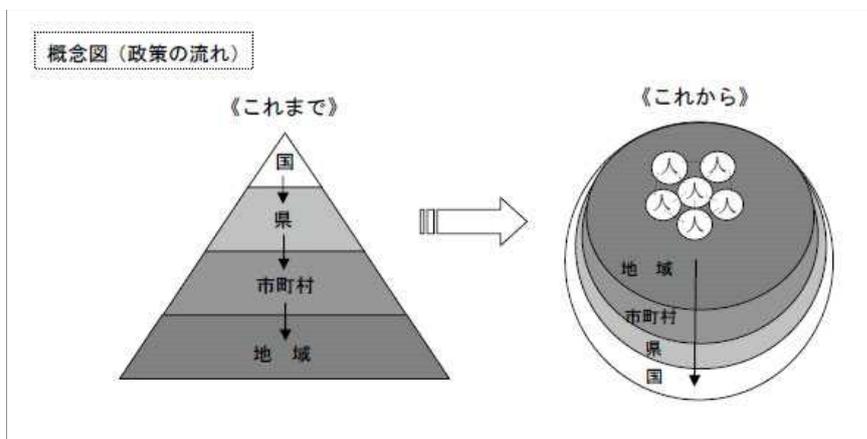
数年前の盛り上がり比べ、現在は休止している通貨なども多く、導入にあたっては慎重な判断が必要となるが、例えば和紙を使ったコミュニティ通貨などは、今立町の表現としてはきわめて明確なものになりうるため、検討に値するメディアであると思われる。

1-4

まとめ：情報発信の内容と方法について

様々な批判はあるものの、長野県知事である田中康夫氏の発言と行動は評価されてしかるべき事柄である。「21世紀の日本は地域の時代である」といういたるところで語られているテーマを、政治のレベルで実践し、一定の成果を上げている数少ない人物であるというのが理由である。

彼の行った行動の中で、地域資源の情報発信をテーマとする本稿の立場から見て、最も大きく評価できるのは、地域からの思想の発信、を实践していることであろうと思われる。長野県から発表された『「未来への提言」～コモンズからはじまる、信州ルネッサンス革命～』という文書において、以下のような図と解説のテキストが添付されている。



「コモンズからはじまる、信州ルネッサンス」のもつ多様な意味

- ・ 中央から地域へという政策の流れを大きく転換し、一人ひとりの相貌(かお)が見え、体温が感じられる地域から社会の再生をはかること。
- ・ 信頼で結ばれた自律的な人々の活動により、協力社会を創造していくこと。

<http://www.pref.nagano.jp/kikaku/kikaku/vision/index.htm>

“「未来への提言」(概要)～コモンズからはじまる、信州ルネッサンス革命～”より転載

地域における情報発信は、特産物やエコツアーの適切な情報などとともに、その背景に横たわっている地域の人々の考え・思い・哲学が、内容や方法に反映されていなくてはならないのではないかと。そうでない限り、ただの観光情報に堕し、本当の地域活性、非対称性を対称に向けていく運動は実現されないように思われる。NPO という組織は、その主体として、自治体、地域住民、企業、国から適切な距離を置きながらその思想を語る事ができるポジションとして、大きな意味を持っていると思われる。

2章 スロー/クラフト系クラスタの関心

2-1

はじめに

ここ数年、スローライフという言葉が一般に流通してきた。スローという言葉が流通しはじめたのは、「スローフード」というイタリア発の食のムーブメントからである。現在では、様々な「ファースト」な生き方や仕組みに対して一定の距離を取る価値観として、スローライフと総称されることが多い。今立が今立の外と関係する様々な事業を考えるにあたって、和紙や古民家、自然、文化財などの資源をどのようなフォルダ名、プラン、あるいは思想に関連づけることができるのか、そのヒントとしてこの「スロー」というコンセプトは非常に適切な概念になると思われるため、市場調査の対象とした。

スローフードムーブメントについて

まずはルーツであるスローフードムーブメントの考え方や嗜好を見てみよう。スローフード協会のウェブサイトに掲示されている活動ポリシーは、

- 1 消えつつある郷土料理や質の高い小生産の食品を守ること。
- 2 質の高い素材を提供してくれる小生産者を守っていくこと。
- 3 子供たちを含めた消費者全体に、味の教育を進めていくこと。

の3つ(*)。ここから抽出できるのは、「古くからあるモノ(消えつつある)」「大量生産ではないもの(小生産)」「高品質」「次の世代(子供達、教育)」というコンセプトである。

(*)<http://www.nt-slowfood.org/about/idea.html>

「スローライフ」

では、スローライフとはどのような考えか。明確な定義はどこにも存在していないが、いくつかサンプルを挙げる。

「のんびり生活するということではなく、充実した時間を過ごすということ。」

『スローライフでいこう ゆったり暮らす8つの方法』 エクナット イーシュワラン著 ハヤカワ文庫NF

「スローライフとは、例えば、大切な人と一緒にゆっくりおいしい食事をしたり、地元の気候や自然を感じたり、たっぷりの睡眠を取ったり、そのような心豊かな生活をゆったりと送ること

をスローライフと呼んでいます。」

株式会社コクヨウェブサイト

<http://www.kokuyo.co.jp/yokoku/mame/ecoeco/26.html>

「スローライフとは、かつて我々がもっていた豊かなものを取り戻すことだと思う」(緑の自然と文化を考える会代表 オーガニックごうだ 郷田美紀子さん)

<http://www.a-com.co.jp/kyushu-info/slowlife/main2.html>

「スローライフとは、まさに、多様な価値観を認め合い、それぞれが本当に自信を持てる生活を尊重しあう所から始まると考える。」

(伊庭みか子さん 安全な食と環境を考えるネットワーク)

<http://eco.goo.ne.jp/food/slowfood/danwa/danwa04.html>

以上のテキスト等を踏まえ、本稿ではとりあえずの定義として、

「数十年後の自分と世界・自然を意識し、近代消費社会から一定の距離を取った生活」

という定義を立て、媒体分析を行う。

2-2

スロー系、及びクラフト系ターゲット層について

上述した、「スローライフ」について関心の高い層はどこにあるか。ヒアリングと媒体分析によって浮かび上がってきたのは、

- 1 都市に居住する20代後半から40代の男女の特定クラス
- 2 60歳前後の定年前後の男女

その中でも、今立町の地域資源として重要なリソースである、越前和紙と古民家というテーマに近いと思われる、両者を本稿のターゲットとし、このクラスに属するユーザに対しインタビューを行った。また、クラス1の購読誌を2誌選択し、媒体分析を行った。

2-2-1

ユーザーインタビューと分析

当該クラスに属するユーザに対し、今立の地域資源資料を見せ、意見聴取と質問を行った。

・対象者：田中夏実さん(30)

プロフィール：東京都生・在住。大学を卒業後、料理研究家見習い、飲食店調理を経て、現在コンピュータゲーム制作会社にて制作業務。

趣味：音楽鑑賞、手芸、アウトドア

主な購読誌：Ku:nel、インターネットマガジン、Ginza、

・(今立について)：ちょっと遠いけど、おもしろそう。縁があったら行くと思う。このインタビューが縁か(笑)

・(古民家の写真を見て)：かっこいい。住みたい。新建材の建物には興味がない。ああいう家には住めない。

・(何に惹かれるか)：木。木と紙で家ができるというのがすごいことだと最近気づいた。あとは環境。山が近い。

・(和紙について)和紙はたまに買う。渋谷のロフトや原宿のデザイナー向け紙屋など。折り紙にも興味があるので。自分で作れるとしたらとてもやってみたい。東京でテスト体験のようなことができれば行くと思う。

・(岩野市兵衛さんの写真を見て)：職人さんの世界はあこがれる。仕事に対する姿勢とか。見習いたい。できてない(笑) お話してみたい。

・(農業について)：やってみたいが根性無しなのでまだ無理だと思う。でも田植えなどはたまに行っています。農業がこれからの日本にとって大切という話を良く聞くと、それ以前に自分にとって大事(笑) 食べ物は怖いから気を付けるようにしたい。できていないが。そういう勉強をしようと思って

本を買って読んでいる（食育関係）。

- ・（移住可能性は？）：すぐには無理だと思うが、機会があれば見に行きたいと思う。
- ・（スローライフについて）：「スローライフ」の考え方は分かるし、共感できるところもあるけど、スローライフな暮らしをしよう、みたいなことをコピーで書いたりされると退く。商売臭いのはなんとなく分かるので。
- ・（Ku:nelについて）：力が入ってないのいいと思う。最近ちょっと売れてきたみたいで広告がやかましいけど、それでもまともな方だと思う。スローライフとか言わないし（笑）。手作り感があって好きなのかも。あとすごいいい顔をしたおばちゃんの写真とか。いい顔が見たい。
- ・（Arneについて）：知らなかった。でも好きかも。『暮らしの手帖』路線は好き。地に足が着いた感じというか。

・抽出できるキーワード/テーマ

「遠いものに対する冷めた視点」（マスメディアに対する距離感）「近いものへの愛情」（手作り、家族、暮らし）

2-2-2

ユーザーアンケート調査（団塊世代への聞き取り調査）

対象 / 昭和 22～24 年生まれの団塊世代（55～57 歳） 首都圏在住・勤務
調査方法 / 電話インタビュー

* 回答の詳細については末尾の資料 1 を参照のこと

[質問]

- (1) 今後、どのような生活を送りたいか？
- (2) 今後の人生で特に大切にしたいことは？
- (3) 今後、実行してみたいことは？
 - (4) 自分の人生観は？
 - (5) 妻への希望は？
 - (6) 子どもへの希望は？
- (7) 団塊の世代の特色は？
- (8) 現在の会社・仕事での立場は？
- (9) どんな旅がしたいか？
- (10) 郷里への思いは？



[インタビュー結果からの抽出アウトライン]

まだまだ仕事を頑張る意欲が高い。
物質よりも心の充実を強く求め、個性を重視。
新しい体験・学びに積極的。
気持ちが若く、活動的。
家族や友人との人間関係を重視。
団体旅行より、個人・家族旅行を好む。
年齢を重ね、むしろ郷里への思いが強い。

2-2-3 媒体分析

2-2-3-1 "Ku:nel"

Ku:nel”：マガジンハウスが発行している隔月刊誌。身近な気持ちの良さをテーマに、手作り系（料理・手芸・工作など） ゆったり系（旅行）のコンテンツをゆるいデザインで掲載。発行部数は公称で14万部。最近の雑誌では最も成功している1つで、追随雑誌も多い。



・最新号（第7号）目次

スマートな自転車に乗りたい

スタイリスト・鈴木順子の終わらない？ 部屋作り 毎日大工で、今日もリフォーム中
このウイットに脱帽です スマイソンの手帖

郷土料理の旅 房総の絵巻きずし

長尾智子、美食（ごちそう）に唸る 大食いだらけの小さな国へ(2)

大阪・器の店『Saji（さじ）』店主は考えた「もの」は、てれくさくないようにそ
っと置く

江國香織の往復書簡

大橋利枝子のスモッキング あら、ふしぎ キュッとしばって、クシュッと変わる
波を撮る僧侶・梶井照陰 目を凝らせば、見えてくる

吉本由美、森の"ねぼすけ"を探しにに清里へ やまねクン、発見!?

「春の絵」川上弘美

お宅訪問【絶景編】 仰げば大空、振り向けば犬

・ これまでの特集と扱っているテーマリスト

13号：風特集、自転車、大工仕事、手帳、郷土料理（房総）、器、スモック、僧侶、やまね（動物）、お香、仲直り、

12号：雪特集、花、お酒、フェルト、彫刻、紙、絵本、会社、家、小説、

11号：ミシン特集、クリスマスカード、ハワイ、おでん、雨、民芸、鳥取、パジャマ、手作り本の作り方、お茶、正月

10号：小さな町特集、南仏、湯豆腐、郷土料理、綿の肌着、絵描き、麻、二人暮らし、散歩、ミルク

9号：エプロン特集、ポルトガル、赤ちゃん、おにぎり、動物、本、貸本喫茶、タオル、能登、工作、金沢、ジャム、カレー、ジャズ、

8号：ハワイ特集、庭、サーフィン、食堂、ハワイアンキルト、おやつ、聖歌隊

7号：お引っ越し特集、部屋、お米、野菜、郷土料理（岩手）、古道具、ふんどし、お花見弁当、バッグ、寝る前にすること、

6号：本特集：高村光太郎、ネギ、お肉、アップリケ（宮脇綾子）、ルームシューズ、看護の仕事、動物の家、本、布仕事、お宅訪問（福岡）、干し鱈、レシピ、

5号：コーヒー特集、おせち、ブランケット、夫婦生活、鍋つかみ、自転車、瑠璃ポット、旅、私の容器自慢、お掃除

・ 抽出できるキーワード・テーマ

「自分に近い（近くにあるとよい）モノ・コト、」「身近にあるいいモノ・コト」「かわいいモノ・コト」「見直すと楽しいモノ・コト」

2-2-3-2

“Arne”

2002年創刊。『平凡パンチ』のイラストで有名な大橋歩氏がほぼ一人で企画・取材・スタイリング・撮影などを行っている、手作り雑誌。テーマは衣食住と合いたいヒト。発行部数は2万部だが、取り次ぎを通しておらず、書店からの申し込みによる直販ルートのみなので、一部の書店でのみ入手可能。



・ 最新号目次

11号：

特集・『ギンザ』編集長 淀川美代子さんにおはなし聞きました

- ・ 犬の約束 糸井重里
- ・ 似合うブラウスとシャツ
- ・ 今日の弁当
- ・ 匡貴くんのソファ

・これまでの特集

- 1号：特集：柳宗理さんのお鍋とポウルは断然すばらしい
- 2号：特集：小野塚秋良さんのおうちにうかがいました
- 3号：特集：安西水丸さんに男のおしゃれの話を聞く
- 4号：特集：高知の梅原真さんの正しい仕事
- 5号：特集：堀井和子さんのいつものパンのつくり方
- 6号：特集：川上絹子さんの泊まりごち良いビジネスホテル
- 7号：特集：『古道具坂田』のご主人はお考えがやわらかいのです。
- 8号：特集：佐藤雅彦さんの僕が好きでしょうがないもの
- 9号：特集：小暮徹さん、台所の屋根の上に野菜をつくる
- 10号：特集：赤木智子さんの家の仕事

・抽出できるキーワード・テーマ

「ヒト」「手作り」「衣食住」

2-2-4

スロー/クラフト系ムーブメントの内容と今立地域資源との接続可能性

本稿で「スロー/クラフト系」と呼んでいるクラスタは、「Ku:nel」とその関連雑誌・書籍の増加から察するに、現在の大きなライフスタイルトレンドの一つであることは確実である。また、このトレンドは、20-30代の女性が牽引しているものの、その他の年代にも波及しつつあり、一定の定着を果たすと考えられる。その理由として考えられるのは、

- ・ 環境問題や食べ物の問題、豊かさとは何か、などのテーマは世代を問わない共通の問題であり、これらの問題に対する一定の対応・解決・ライフスタイル提案を行っているため
- ・ 「遠くにある憧れの何か」をテーマにしているのではなく、身近にあるモノ・コト、自らの足下をきちんと見る姿勢、などをテーマとしているため

などである。

当該クラスタの関心と今立町のリソースのマッチング

“Ku:nel”、“Arne”の扱っているテーマと、今立の地域資源を比較してみると、このクラスタの関心と今立町のリソースは多くの点でマッチング可能である。共通しているテーマを列挙してみると、

風、大工仕事、郷土料理、器、雪特集、花、お酒、紙、絵本、家、雨、民芸、手作り本の作り方、正月、小さな町、絵描き、散歩、工作、庭、おやつ、部屋、お米、野菜、古道具、

など多数が挙げられる。

今立町のリソースは、本稿で仮定したターゲット層に対し、訴求力のあるコンテンツになりうることが分かった。

まとめ：終わりに

今立町の地域資源は、潜在的に大きな可能性を持っていると本稿では結論付ける。そのリソースを、

- ・ 誰が
- ・ どのような方法で、
- ・ どのようなターゲットに向けて、
- ・ どのような表現と内容で

発信し、実践していくか、という当プロジェクトの問いに対し、方法については、1章で、ターゲットと表現・内容については、2章で、若干の分析と提案を試みた。「誰が」という事業体制について、及び具体的な事業提案などについては他稿を参照のこと。

資料 1

資料1：団塊の世代への聞き取り調査

< A 氏 / 電機メーカー勤務 / 子ども 2 人 20 代 >

- (1) いまの会社で、あと 10 年頑張りたい。
- (2) 自分の個性の発揮。
- (3) 地域のボランティア活動。
- (4) 悔いなく生きる。
- (5) いまのままで満足。
- (6) 厳しい社会なので、たくましく生きて行ってほしい。
- (7) 人数の多い世代で、価値観が多様。
- (8) 年齢的に、そろそろ子会社への出向が心配。
- (9) たまには家族で温泉に行きたい。
- (10) 年に 1 度は墓参りで帰省している。気が休まる。

< B 氏 / 情報システム会社勤務 / 子ども 1 人 30 代 >

- (1) 仕事オンリーでなく、これからは家庭を大事にしたい。
- (2) 心身の健康。
- (3) 何か趣味を持ちたい。
- (4) 他人に左右されずマイペース。
- (5) 夫婦の会話が少ない。
- (6) そろそろ結婚してほしい。
- (7) 気持ちだけはいつまでも若い。ファッションも若い。
- (8) 技術革新が激しく、いまでも勉強が大変。
- (9) 田舎気分を満喫したい。
- (10) 両親が亡くなってから、10 年帰っていない。気軽に帰れる家がない。

< C 氏 / 通信メーカー勤務 / 子ども無し >

- (1) 子どもがいないので、女房と楽しく生活したい。
- (2) 1 日 1 日を前向きに、主体的に生きること。
- (3) 女房と共通の趣味を見つけたい。
- (4) 何事も頑張りすぎない。
- (5) 女房も仕事が多忙なので、健康に気をつけてほしい。
- (6) 無し。
- (7) 大人になりきれない、老人になりたくない世代。
- (8) 管理職のプレッシャーはあるが、充実感がある。
- (9) 毎年、女房と 1 ヲ所に長く滞在する旅がしたい。
- (10) 年齢と共に、大切さを感じる。

<D氏 / 飲食店経営 / 子ども3人 20代>

- (1) いまの店をさらに大きくしたい。
- (2) お客様との信頼関係。
- (3) もう1軒、店を出して、子どもに譲りたい。
- (4) 人に喜んでもらうのが自分のお喜び。
- (5) 夫婦で店を頑張ってきたので感謝している。
- (6) 友だちを大切に。自分の個性を生かす。
- (7) 結束力、行動力がある。
- (8) 商売だから波はあるが、この不景気な時代、まあ順調な方だと思う。
- (9) 日本の伝統について学んでみたい。そんな旅があれば。
- (10) 将来、郷里に戻って店を出す夢もある。

<E氏 / 不動産会社勤務 / 子ども2人 20代>

- (1) いつまでも新しい経験を楽しみたい。
- (2) 多くの新しい人たちとの出会い。
- (3) 新しい資格や技術を身につけて、退職後、新たな人生を踏み出したい。
- (4) チャレンジスピリット。まずは行動。
- (5) たまには夫婦で旅行やコンサートへ行きたい。
- (6) 2人とも大学生なので、進路をしっかりと考えてほしい。
- (7) 精神も、見た目も、いつまでも若々しくいたい。
- (8) 「厳しい」の一言。早期退職者も少なくない。
- (9) 団体ツアーでなく、個人の旅。
- (10) 年に2回は帰って、息抜きしている。

< F 氏 / 事務機器販売会社勤務 / 子ども 2 人 20 代 >

- (1)物質よりも心を豊かにしたい。
- (2)自分の時間を充実させたい。
- (3)無趣味なので、夢中になれる趣味がほしい。
- (4)毎日が学び。
- (5)趣味が多くてうらやましい。
- (6)親を頼らず、自分の力で生きて行ってほしい。
- (7)仕事も遊びも打ち込むタイプが多い。
- (8)もはや終身雇用の時代ではない。残りの人生をどう生きるか、迷いがある。
- (9)自分の人生を振り返る、土地の人と触れ合う旅。
- (10)近くて遠い、遠くて近い存在。

< G 氏 / 区役所勤務 / 子ども 1 人 10 代 >

- (1)贅沢を求めず、静かな時間を味わう。
- (2)家族や友人たちとの人間関係。
- (3)社会に貢献できる活動。
- (4)願えば、道は開ける。
- (5)同じ職場なので、自分の仕事に理解がある。
- (6)進路に迷っているが、焦らず、じっくり考えてほしい。
- (7)割と柔軟さがあるが、意外と頑固なところも。
- (8)職員が減って、仕事は増えた。昔よりきつい。
- (9)子どもに、自分探しの旅をさせてやりたい。
- (10)やっぱり、懐かしい、掛け替えのないところ。

< H 氏 / タクシー会社勤務 / 子ども 2 人 10 代 >

- (1)ムダをせず、自分の成長に投資したい。
- (2)自分の気持ちに正直であること。
- (3)日本各地を巡りたい。
- (4)歳をとっても好奇心を忘れない。
- (5)いつまでも仲良く元気で。
- (6)もっと勉強しなさい。いましかできないことがある。
- (7)理屈っぽい話が好き。つい論争になる。
- (8)昔に比べて乗客がガタ減り。回復の様子がない。
- (9)派手な団体旅行より、素朴な一人旅。
- (10)いずれ兄弟が亡くなったら、帰る機会もなくなるかも。

<I氏 / 航空会社勤務 / 独身>

- (1)みんな苦しいことがあっても頑張っている。自分も同じ。
- (2)かっこよく歳を重ねたい。
- (3)具体的にはないが、創造的なものに取り組んでみたい。
- (4)人生に偶然はない、すべてが必然。
- (5)無し。
- (6)無し。
- (7)気持ちは、まだまだ30代・40代のつもり。
- (8)いまは子会社へ移動になって、なんとかやっている。
- (9)郷土料理の食べ歩き。田舎に別荘を持つのも悪くない。
- (10)子ども時代のことを、最近よく思い出す。

<J氏 / 建設会社勤務 / 子ども2人20代>

- (1)2人の娘が嫁いだので、カミさんと穏やかに暮らしたい。
- (2)いつも、何かに熱中していきたい。
- (3)料理を作ること。
- (4)仕事とプライベートを区別する。
- (5)これからもよろしく。
- (6)孫を楽しみに。
- (7)いつも競争してきた世代だから、精神的にタフ。
- (8)成果主義になって給料ダウン。中間管理職の典型パターン。
- (9)とにかくノンビリできる旅。美味しい郷土料理を食べて。
- (10)何年も帰ってないので、久しぶりに帰りたい。

報告 3

今立地域資源調査研究報告書

(特)森のエネルギーフォーラム
調査・研究員 福嶋 輝彦

今立地域資源調査研究報告書

調査・研究員 福嶋輝彦

はじめに

今立町の地域資源調査について NPO 法人森のエネルギーフォーラム様からお誘いを受け調査をやらせて頂く事になったのは、2つの理由からである。

一つ目は、母の実家が今立町であり、子どもの頃今立町でよく遊び、今立の風景は私の原風景として強烈に残っており、今立の地域資源の調査を行うことは、私自身の個人史を探っていくことになるのではないかとの興味があった。

そして、私は福井市で生まれ、高校を卒業後、東京に行きその後、ニューヨークに住み、「都会の生活」にあこがれ、「都会の生活」をしてきたのであるが、一昨年父の看病で半年間、福井に戻ったのをきっかけに、田舎の生活や田舎の町作りの方に興味・関心が移った。

この変化は自分の年齢によるものが大きいと思うが、私のような根無し草で何か常に刺激を求めているものにとって、単に東京に魅力がなくなり、田舎の町や暮らしに可能性を感じ始めたからだと思う。今回の調査を契機にその事を研究できれば、私と同じようなタイプの都会生活者はどんどん田舎暮らしに魅力を感じ始めるのではないかと思った。

もう一つの理由は、私は現代アート、現代演劇、映画等の製作を行い、表現に関わる仕事を行ってきたが、かねてから関心のあった環境やエネルギーの問題に、表現の方法論や考え方をとりいれて、環境やエネルギーに関心を持ってもらい、その解決方法を日常レベルで考える契機作りを行う活動を行ってきた。

当NPOの増田代表にお会いし、増田代表のこれまで行ってこられた事、今後やろうとされていることとお聞きして、自分の活動と大変近いことをやられようとしていることを知った。

環境とアートを同列に考え活動していくという事は、まだまだ一般的には理解されにくいだが、同じ思いを持った増田さんと一緒に活動してみたいと思った。

そういった2つの観点から調査を開始した。

目次

- 1 調査研究方針
- 2 調査研究内容
- 3 実践
 - 3-1 今立の田舎暮らしにおける事業案
今立古民家匠ロングステイプロジェクト
 - 3-2 南坂下を拠点としてハツ杉森林学習センターと連動する文化プログラム案
子どもアートセミナー
 - 3-3 ハツ杉森林学習センターにおける利用形態の研究
- 4 まとめ

1. 調査研究方針

今立町の自然及び歴史文化の地域資源の調査・研究を行い、その成果を今後のグリーン・ツーリズムを始めとした今立町の地域活性化に役立てていく為に、今立町の南坂下知久を中心とした地域資源の調査・研究内容を、実践を伴いながら認識を深めていく「アクションリサーチ」を行った。

2. 調査研究内容

- ・ 今立町の産業（和紙、漆、かま商い）の歴史や信仰及び文化との結び付き等の聞き取り調査
- ・ 農業、林業における産物の実態を実際に栽培や収穫を行いながらの調査研究（雁皮の収穫、無農薬米の栽培、収穫、畑における昆作の実験研究）
- ・ 和紙を始めとする工芸や大工等の匠に関する技術
- ・ 農業、林業における作物の加工における実験研究（農作物の燻製による加工、そば打ち、木材の炭化による加工）
- ・ 八ツ杉森林学習センターや卯立の工芸館等の今立町の施設利用に関する調査
- ・ 南坂下地区の集会に参加しての地域の会合における調査
- ・ 今立型グリーン・ツーリズムの調査（お米のオーナー、農家民泊の実態）
- ・ 東京において、首都圏の人々が今立のどのような地域資源に関心を持つかの調査
- ・ 使用されていない古民家の調査とその利用方法の実験研究
- ・ 八石分校における河合さんの活動と、後継者達のその後の活動、町作り

3. 実践

3-1 今立の田舎暮らしにおける事業案

2の調査に基づき、今立の田舎暮らしをどのように事業化していくかについてのプランを策定した。

プランA

古民家再生事業 A。今立の古民家を建物及び昔の生活を保存しつつ、現代によみがえらせるための再生計画を立てて、福井県及び今立町に働きかけてその再生工事及びその後の運営を請け負う。再生後は、これをモデルハウスとして、古民家を再生したい自治体、個人に営業を行い、再生計画、工事等の事業を行っていく。

プランB

今立町にある古民家をゲストハウス、カフェ、直販の事務所、ショップ、商品開発事務所等に改造する。総予算は大体500万円として、全国よりボランティアを募り、改築を行う。

実行委員会でユニットを形成し、改造計画を立てて、ボランティアのデレクションをしてもらう。完成後はその運営で事業化していくほか、同じような古民家再生を希望する人に古民家の斡旋、企画、工事等を行う。

プランC

都会の不動産会社とタイアップし、今立の長期型グリーン・ツーリズムの斡旋を行う。

プランD

都会の靴やファッションデザイナーとタイアップして和紙の商品開発を行う。

プランE

福井のプロダクトデザイナーと組んで商品開発を行う。

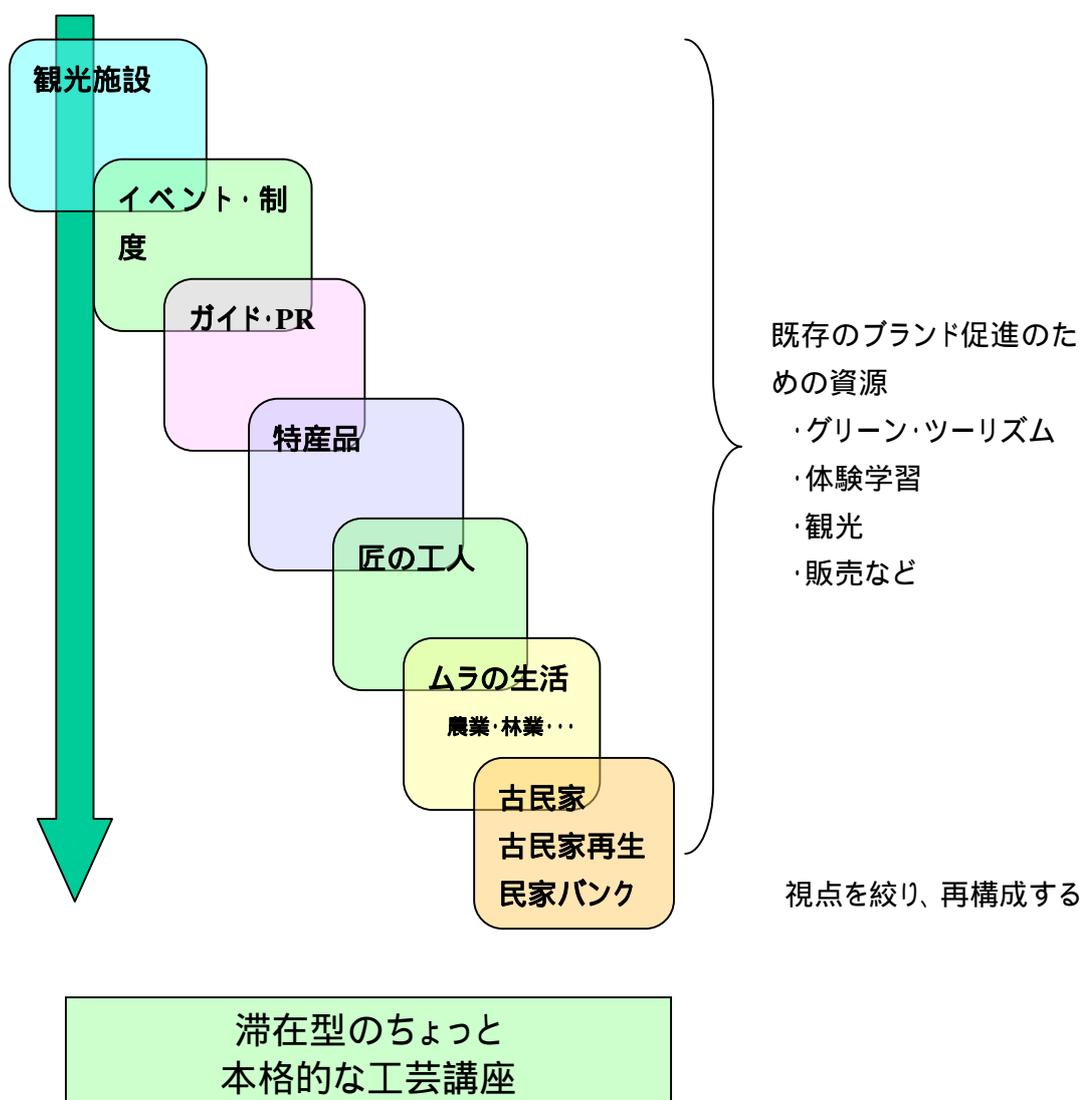
3-1-1 今立古民家匠ロングステイプロジェクト

大まかな事業案をもとに、福井県の「地域ブランド創造普及活動」の応募があり、計画書を策定し、提出した所採用され、私のアクションリサーチは、その事業の中で行われることになった。

福井県地域ブランド創造普及活動事業計画概略

PJコンセプト：既存資源と活動を再構成し、絞り込んだ市場からの一点突破・全面展開へ

概略：都市からの訪問者の知的活動をツーリズムから“ロングステイ（中長期滞在）”へ深化させる。現存する知的活動資源（ハードおよびソフト）を最大限活用するが、プライベートなステイ施設には再生古民家を位置付け、その活性化を実現する。

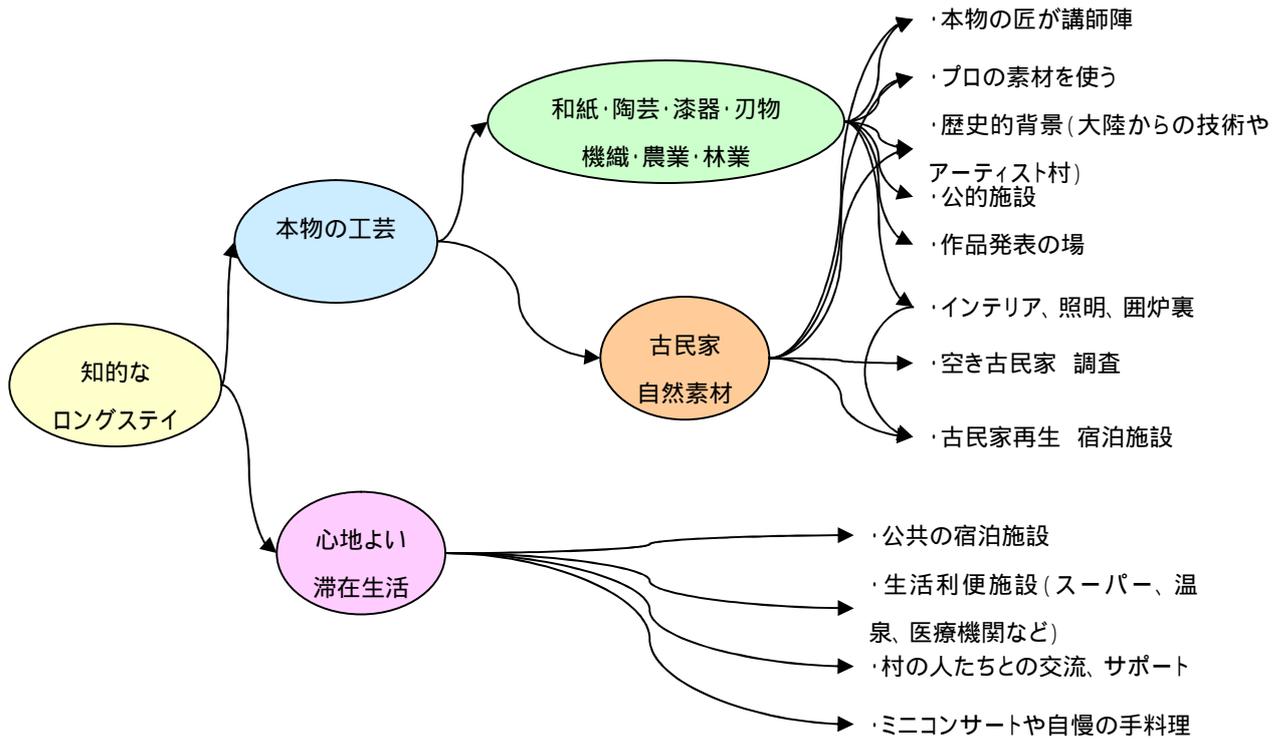


プロジェクトのポイント

ポイント

1) 打ち手の構造化による、合目的的アプローチ

資源(スペック)を全て使うのではなく、目的に合う資源を適切に選択し、パッケージ化する事が重要。



<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">事業内容</p>	<p>今立町は、歴史的資源として地場産業の、和紙・繊維の地場産業を基幹に発達し、漆器・メガネ・家具製造などを含め、手工業の盛んな町で、歴史、文化及び豊かな自然環境を有する地である。また、エコ・グリーン・ツーリズム準備協議会を立ち上げ、国の特区指定を受け、農業体験プログラムや農家民泊を組み合わせたグリーン・ツーリズムを積極的に推進している。</p> <p>当実行委員会では、歴史、工芸、芸術、農業、林業など今立由来の地域資源を組み合わせながら、数多く残る古民家を利用・再生し、中長期滞在型の観光・研修プログラムを計画し、地域住民の協力と参加を得ながら、「ライフスタイル」を体験してもらう「新たな観光のあり方」を提案・実施する事業を行う。</p> <p>また、都市からの観光客・中長期研修生と共同で、今立住民にとっては普段見慣れて気づきの薄い今立の豊富な農産物や山の幸や森林資源等の「あるもの探し」を「地元学」の手法により実行し、都市住民のニーズに応じた素材を再発見し、工芸品等をアレンジした「暮らしの中から」発案された自然素材のリフォーム材、食品の特産物・生活用品雑貨の開発及び販売促進を積極的に進め、中長期滞在型の観光・研修プログラムと相乗効果を十分に発揮し得る事業展開を行っていく。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">全体計画</p>	<p>A. 本格伝統工芸講座 事業</p> <p>今立の各地場産業の人間国宝はじめ無形文化財、伝統工芸士など匠に講師となってもらい、滞在型の本格伝統工芸講座を行う。講座や滞在は、古民家の農家及び再生された古民家で行う。</p> <p>B. 再生古民家 事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古民家再生講座・ワークショップ ・自然素材リフォームパック販売、一級建築士によるDIY (Do It Yourself)講座 <p>また、利用されていない古民家を調査し、古民家再生のプロジェクトを行い、その再生過程をワークショップ形式の滞在型観光・研修の講座プログラムの一つとする。</p> <p>C. 商品開発、販売事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都市からの研修参加者と共同で、今立のあるもの探しを行い、暮らしの中から発想し自然素材と工芸品をアレンジした食品の特産品、生活用品、衣服等の商品開発・販売 <p>都市からの研修生と共同で、今立住民には気づきにくなっている、今立にある自然素材を再発見し、工芸をアレンジした暮らしの中から拾い見つけた食品の特産品・生活用品雑貨、衣類・リフォーム材等の開発を行い、モノではなくライフスタイルや文化を発信していくというコンセプトを徹底した総合的な戦略での販売事業を行う。</p>

	<p>【観光誘客】この計画は、京阪神の 50 - 60 歳代の知的好奇心の強い夫婦を対象とした長期滞在型の研修プログラムと、20 - 30 歳代を対象としたプログラムの 2 本立ての、はっきりと、マーケティングターゲットを絞った開発計画とし、1、2 年目は継続して参加するお客様の口コミを中心とした誘客方法から開始する。使用されていない古民家を再生させるプロジェクトを、その研修プログラムの一つとし、研修・宿泊施設として開発していく。研修プログラムは、一般的な価格より高く設定し、その価格に見合った教師陣の充実と付加価値により誘客できるプログラム開発を行う。インターネットによる情報発信や雑誌メディアとタイアップした情報発信を繰り返し行い、誘客効果を高めていく。</p>
	<p>【雇 用】この計画では、まずは今立の地域文化や古民家の調査を行う「調査員」、観光客・研修生と匠を繋ぐ「コーディネーター」、古民家再生を行う「リフォーマー」、農家民泊、古民家での滞在を世話する「スタッフ」、観光客・研修生と一緒に地元学に基づいた「あるもの探し」を行う「指導者」「語り部ガイド」及び特産品・生活用品雑貨、リフォーム材等の製品開発を行い、販売促進を行う「スタッフ」、情報発信、雑誌とのタイアップを含め、パブリシティを担当する「スタッフ」を雇用する。</p>
	<p>【独創性】この計画は、従来行われてきた工芸等の短期の体験ツアー等とはまったく違い、様々な今立町の地域資源を組み合わせた「新たなライフスタイル」を提案する中長期滞在型の本格的な伝統工芸並びに古民家再生の研修プログラムであるという点や、都市からの参加者と地域住民がエコ・グリーン・ツーリズムを共同で行い、商品開発に結びつけていくという手法、「モノ」を売るのではなく「文化」や「ライフスタイル」を製品開発の中心にすえて、販売戦略を行っていくという点が独創性を有する取り組みとなっている。</p>

平成16年度今立PJ事業の結果報告

今立の水害による影響で事業が4分の1半期遅れることになったが、和紙と古民家を組み合わせ、匠とともに遊ぼうという遊作塾を主事業としてキックオフシンポジウム、プレ講座、和紙講座2回、古民家講座3回を行った。

総括：

1. 各講座とも大変内容の濃い充実したプログラムを行ったが、参加者が予定を下回った。十分とはいえないが、新聞広告等の広報も行ったが、結果的に全く効果を発揮しなかった。企画内容が分かりづらい事もあるのかもしれないが、今後の広報の戦略として、口コミに頼る部分が大きいかと思う。ホームページ、機関紙等を発行して、会員の結びつきの中での広報戦略が最も効果的と考える。
2. 当事業の最も大きい問題点はマンパワーの不足である。本年度は初年度ということもありなんとか乗り切ったが、資金面も含め、採算性をもった事業を計画しないとスタッフのモチベーションを維持し、継続することは難しいのではないかと考える。素晴らしい活動を行っても継続は難しく、プロジェクトとして終了してしまう事例を散々見、体験してきただけにこの事業が継続し、今立の町づくりの中核としての役割を果たすにはお金を生み出す事業の創出がマストであると思う。アカデミックな思想性を有した活動を行うNPOの活動と当事業との線引きを行い、ロマンあふれる事業化計画を立てることができるか？経営のノウハウを有し、当事業に賛同されるメンバーのより一層の参画が必要と考える。
3. 今立町による資金面の援助を含めた最大限の協力を期待していただけに、今立町の当事業に対する評価の低さが残念である。また、今立のこれまでグリーン・ツーリズムを行ってきた団体との連携も本年度はうまくいかなかった。佐々木産業振興課課長の「これまでグリーン・ツーリズムを地道に活動されて来た人々と、補助金を有し、半分以上のメンバーが外部である団体とをいきなり同じテーブルにつかせることは難しい」の発言意図も大変理解できる。今後はグリーン・ツーリズム協議会の場で親睦を行い、各事業に参加して理解を深めていくことで相互間の信頼関係を作っていくしか方法はないであろう。さらに、町に対しても共同事業の提案を行い、実現させて、新たな信頼関係作りと今立町の今後の町作り理念を共有していくことが必要であると考えます。

平成16年度の事業を踏まえ、平成17年度事業の計画を策定した。

森林資源等の自然資源を、再発見し、工芸の技術を組み合わせ、都市住民のニーズに応じた「暮らしの中から」発案された、食品、衣服、家具、小物、陶器等の特産品・製品の商品開発の立案を行う。

4. 旅行代理店を選定し、交渉してタイアップし、随時企画ものの情報発信を仕掛けていく。

2 平成17年度実施計画

平成17年度及び今後の中期事業計画

1. いまだて遊作塾

目標とする全体像：

- ・ 長期滞在を最終到達点として、それまでに3件の滞在用古民家を再生修復する。1週間～1ヶ月単位で滞在出来るものとして位置付ける。
- ・ 滞在しながら受ける伝統技術を生かした和紙制作講座、自然の力を利用した古民家再生や、田舎を体験できる観光プログラムを継続的に行う。
- ・ 今立に伝わる伝統の技や地域の伝統芸能・文化に支えられたもの作りの醍醐味、楽しさを体験してもらい、また、人生の学びの場として、“いまだて遊作の里”を今立のブランドとして確立する。
- ・ 内容：本格伝統工芸講座＋古民家再生講座＋派生する商品開発
- ・ 16年度より始めた今立の各地場産業の人間国宝はじめ無形文化財、伝統工芸士などの匠に講師となってもらい、和紙及び工芸の座学講座に加えて、滞在型の本格伝統工芸講座を行い、広く地域主体の伝統行事や文化活動と連動した観光、いわゆる田舎を体験できる観光として現代の自然志向型の客層をターゲットに、自然食や農業体験受け入れを中心にエコ・グリーン・ツーリズム協議会のメンバーを加えた“いまだて遊作塾”という概念（観光＋学び）としての幅広い取り組みが成果として得られた。
- ・ また、古民家再生講座では、これまでの古民家再生について学びとしての幅の広い取り組み、座学講座やバスツアーなどで勉強したあと、実際に古民家を再生する体験講座では、古民家再生現場を確保して施主と客の中間に入り、実際に再生作業を行う。なお宿泊などは農家民泊及び再生された古民家で行う。
- ・ このプログラム事業を実施することで、そこから派生する商品開発を軸に、田舎学（地域研究）・文化人類学・建築学といった学術的な要素、アート・工芸という表現の要素を複合的に組合せた“いまだて遊作の里”事業としてブランド化を図る。
- ・ マンパワーで平成17年度及び今後の中期事業計画を各部署がその事業化に向け策定し、実践していく。

平成17年：

遊作塾：一泊二日（講座料8,000円）×8回 募集人員：20名＝1,280,000円

開催月：5月～12月

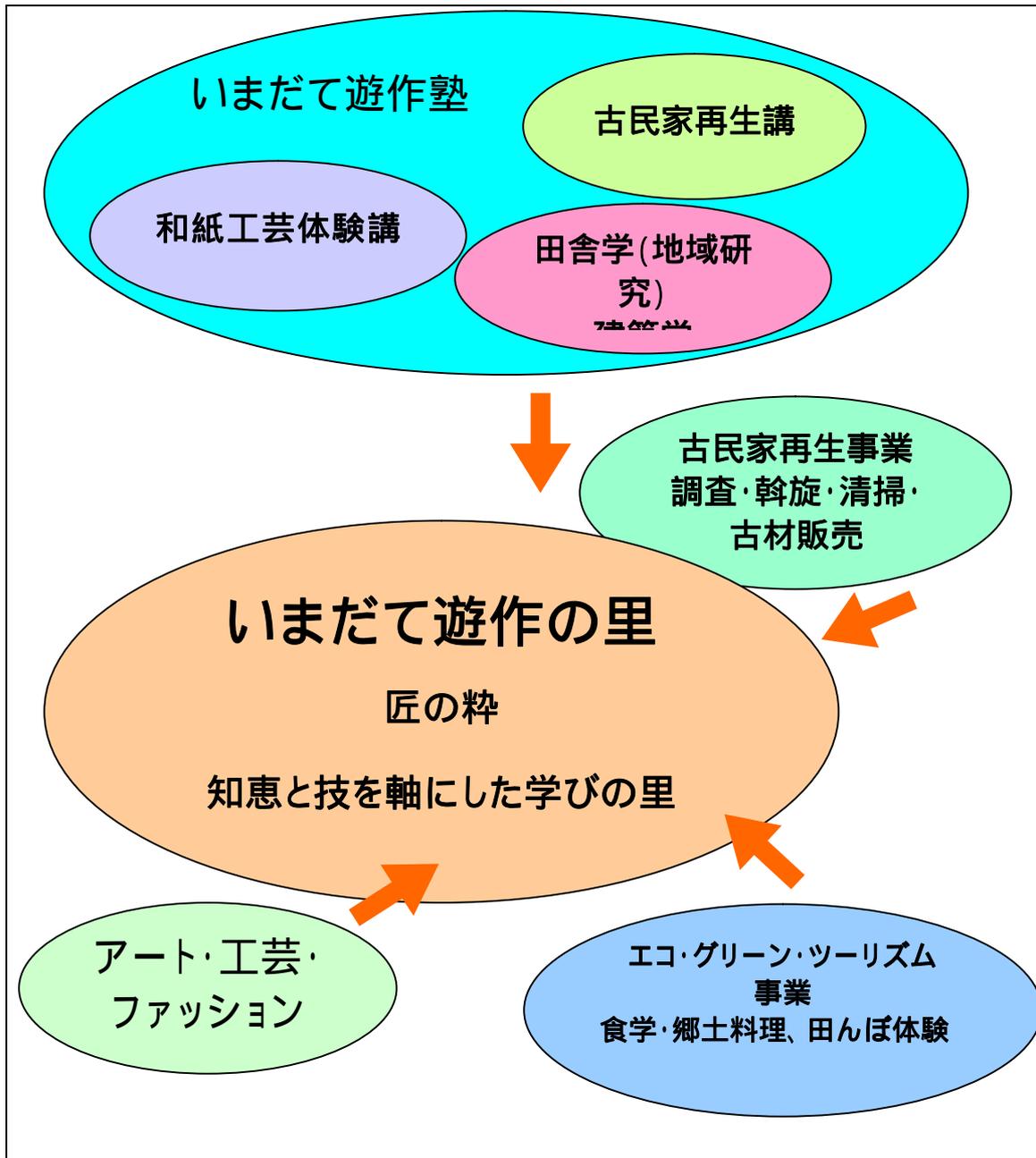
遊作塾：二泊三日（講座料12,000円）×3回 募集人員：20名＝720,000円

開催月：5月（神と紙との祭り大瀧神社お祭りとの連携）

8月（薪能との連携）

10月（国民文化祭との連携）

いまだて遊作塾が目標とするトータルイメージ



いまだて遊作塾の目標到達点

今立に来ればいつでも『ものづくり』や『田舎暮らし』を楽しんだり、都会から脱出し『ものづくり』や田舎暮らしを体験することで、心の癒しを得られたりできる遊作の里づくり。

常に、こういったことを体験できるためには、常に「学びの場」が、活発に動いている必要があります。

生活文化を学ぶ場を集約した「遊作・学びの里」を作ります。

「遊作・学びの里」は、入学料を支払えば数ある講座の中から自分で選択し、生活の知恵・伝統工芸・ものづくりを「体験～専門分野」まで幅広く学ぶことが出来ます。また、この「遊作・学びの里」をブランドとして強化し、平成 19 年度以降にはそのあり方に触れるツアーを組み、県外観光客増に繋がります。

観光

《ショートステイプログラム》

《ロングステイプログラム》

最終的に各プログラムを 2 回以上受講した参加者に、古民家利用フリーパスポートを発行し、確実なリピーターとして確保・保証する。

いまだて遊作塾

いまだて遊作の里・学びの里

- | | |
|---------------|-----------------------------------|
| ・ 越前和紙学 | 岩野市兵衛氏、岩野平三郎氏、梅田太士氏 他 |
| ・ 古民家学 | 直井光男氏、織田清氏、松井郁夫氏、石田慶昭氏 他 |
| ・ 食学（フードロジック） | 栗原悟郎氏、杉村和彦氏、杉谷美緑氏 他 |
| ・ 漆学 | 山嘉商店、蓑輪漆行 他 |
| ・ 芸術・美術 | イマダテ・アートフィールド実行委員会、今立クラフト展実行委員会 他 |
| ・ 有機農業 | 有機農業研究会、エコ・グリーン・ツーリズム協議会 他 |
| ・ 環境・自然エネルギー学 | 田中優氏、横田信行氏 他 |

いまだて遊作塾

- ・ 和紙工芸体験
- ・ 古民家再生
- ・ 商品開発

いまだて遊作・学びの里

いまだて遊作塾を作る
（年齢は問わない）

- 講座カリキュラム
- ・ 工芸体験講座
- ・ 古民家ワークショップ
- ・ 会社設立を課題とする
- ・ 古民家学
- ・ 環境と自然エネルギー
- ・ エコ・ツーリズム

2 . 古民家再生講座

講 師：直井光男棟梁、織田清棟梁、松井郁夫氏、石田慶昭棟梁 他

目標とする全体像：

- ・ 自然エネルギーを利用した、今立古民家の里“越前いまだて”を創造する事業
平成17年
- ・ 対象：一般
- ・ 特に古民家に興味のある人々、都市部の設計者、大工(大工希望者)、工務店など
- ・ 事業目的：古民家再生本格的に考えている人に専門的な知識を勉強していただくことで、リピーターを獲得し、さらには講習受講者に修了証書を発行し、今立古民家取扱者としての位置付けを担っていただき次の情報発信先になっていただく。
- ・ 古民家再生講座内容：
- ・ 講師：今立古民家の特徴(建築歴史学)福井宇洋氏
古民家の特徴(建築構造学)織田清氏
古民家の特徴(建築材料学)石田慶昭氏
古民家の特徴(大工学)直井光男氏
古民家再生事業(古民家経営学)松井郁夫氏 約30人
- ・ 古民家清掃事業：
- ・ 事業目的：古民家調査を今立全域に広げ 持ち主、間取り、権利関係などをデータベースとして獲得するため、まず古民家の状態を把握する必要がある、ただ教えてくれといっても所有者はなかなか教えてくれないと思う、そのため古民家の清掃のお手伝いを行う事で、細かい内容を知ることが目的とする。その上で古民家改修コンサルティング事業などに結び付けていく。
- ・ 事業計画：
- ：地元の大学生(福井大学等)の研究目的にチラシのポスティングをおこなう
- ：電話等にてセールス、(悩み相談もかねる)獲得目標3件
- ：1ヶ月3件を目標に清掃事業を開始同時に改修ができればなおOK
- ・ 古民家斡旋仲介事業：
- ・ 事業目的：古民家清掃(調査)事業(悩み相談から)ピックアップした、売りたい 貸したいなどの物件を整理しHP また古民家再生講座等で紹介し実際に売買・賃貸事業を行う。
- ・ 事業計画：情報発信事業
16年度に引き続き小民家の現状調査を行い、建物の売買、土地建物の売買、土地建物の賃貸、などの情報を整理し、インターネット、情報誌などに登録、ニーズの発掘を図る、また16年度にて受講していただいた人に遊作塾同窓会に入会いただき(年会費5,000円)古民家の情報やイベント情報、開発商品や今立産低農薬野菜などの案内や田舎暮らし情報を送る。

3 . 県外観光者向け和紙工芸体験講座

講師：岩野市兵衛氏、岩野平三郎氏、梅田太士氏 他 伝統工芸士や和紙にかかわる職人さん

全体像：

事業目的：県外から観光に来たついでに和紙制作を体験できる講座を多数設け、越前和紙ブランドのファンとしての新しいターゲット層の促進を図ると共に、今立を“和紙の里”+“遊作の里”としてブランド化を強化する。

平成17年：

和紙工芸体験講座

対象：県外観光者向け

外国人講座：(3,000円×2回×5人=30,000円)

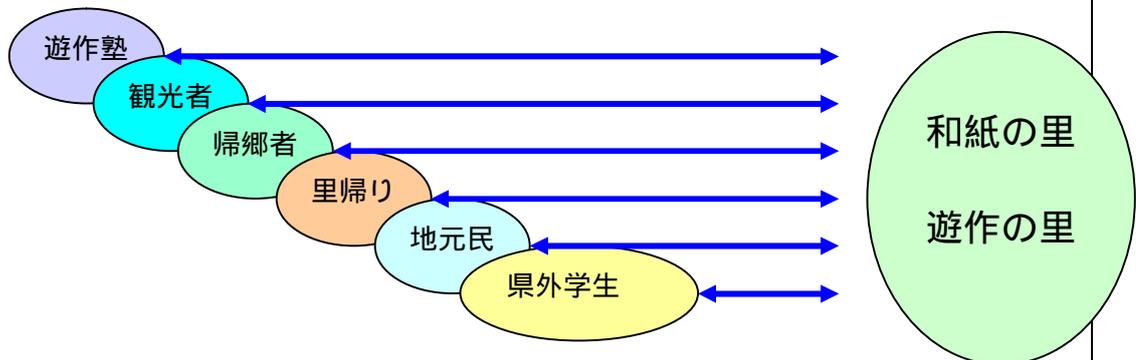
子ども講座：(1,000円×2回×30人=60,000円)

大人講座：(8,000円×2回×15人=240,000円)

遊作塾等から発案される和紙等の工芸に関して商品開発を進め、事業化していく。

《和紙部門》：

- 1 . 和紙を用いたオブジェ、看板、街灯の商品開発・販売
- 2 . 店内または入り口に暖簾、オブジェ等の商品開発・販売
- 3 . 電車の中吊用に和紙を使用する商品サービスの開発・販売
- 4 . ファッション業界とのタイアップによる商品開発・サービスの提供



4. ロングステイ P J

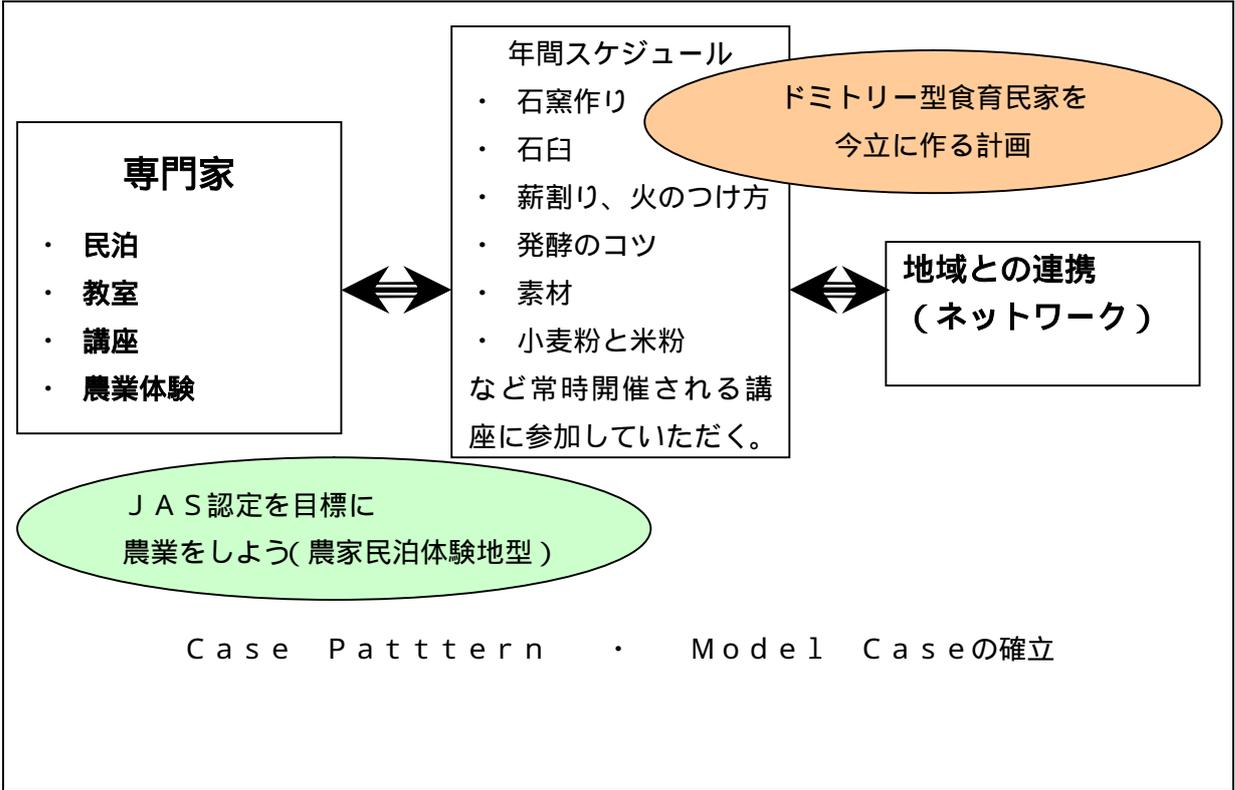
目標とする全体像：

- ・ **ワークショップ事業：**
- ・ **目標とするトータルイメージ：**
- ・ 自然素材リフォームパック販売、一級建築士による D I Y (Do It Yourself) 講座
- ・ まだ利用されていない古民家を調査し、古民家再生のプロジェクトを行い、その再生過程をワークショップ形式の滞在型観光・研修の講座プログラムの一つとする。
- ・ **例：壁塗りワークショップ、たたきワークショップ、竹細工ワークショップなど**
- ・ **古民家再生ビジネスモデル事業：**
- ・ **目標とするトータルイメージ：**
- ・ 自然エネルギーを利用した、今立古民家の里“越前今立”創造事業
- ・ 現存する古民家を最大限利用しながら古民家学の情報発信基地となることで、周辺地域特産物（和紙、打ち刃物、漆器、府中家具）と共存した古民家の里、越前今立としての新しい地域ブランドを創造する。
- ・ **例：エコ・エネルギー古民家モデルハウス**
- ・ **《ロングステイ P J 部門》**
- ・ 1週間～1ヶ月単位のロングステイ地を2から3確保
- ・ 1週間単位で貸し出す（すべて自炊）
- ・ 農業体験できる田畑を N P O と耕作できるプログラムとして開発
- ・ 農家民泊を含めた、週末ステイの受け入れ先を確保

5 . コミュニティ

- ・ **コミュニティ（遊作の里）研究調査部**
- ・ **目標とする全体像：**
- ・ 今立型のエコ・グリーン・ツーリズムと連動した、いまだて地産地消・食育プロジェクト
- ・ 日常的・定期的に行われている天然酵母を使った石釜パン教室を中心に組み込む講座で誰でも参加しやすく、自然志向のニーズに連動する農業体験プログラム（NPO 森のエネルギーフォーラムが開催）や地元食材を使った食べ物を企画開発させて、遊作エコ・グリーン・ツーリズムの地産地消を推進させる。
- ・ **事業目的：**
- ・ 遊作塾、古民家再生講座や今立町エコ・グリーン・ツーリズム協議会とリンクさせる形で農業体験（NPO 森のエネルギーフォーラムが開催）と農作物の加工品体験教室を連動させた今立型のエコ・グリーン・ツーリズム事業を行う。
 1. 田、畑の農作業を通じたエコ・グリーン・ツーリズム事業
 2. パン等の農作物加工品体験講座 石臼、石窯、地元食材の発酵酵母をつかった農作物加工品体験教室事業
- ・ **対象：一般**

農業体験（NPO 森のエネルギーフォーラムが開催）とパンを中心とした農作物加工品体験、自然発酵食品体験を組合せたエコ・グリーン・ツーリズムに興味のある方。
- ・ **事業計画：**
- ・ 農業体験（NPO 森のエネルギーフォーラムが開催）と石窯パン体験教室を毎月 1 回行う
- ・ 参加費 2,000 円×定員 20 人 = 40,000 円
- ・ 農業体験（NPO 森のエネルギーフォーラムが開催）と自然発酵食品講座を毎月 1 回行う
- ・ 参加費 2,000 円×定員 20 人 = 40,000 円



6 . 事業化に関する調査

- ・ **事業化計画：**
 - ・ 遊作の里事業に向けて調査研究業務、ネットワーク作り業務を行う。
 - ・ また、遊作の里 古民家再生事業、和紙工芸講座事業、古民家再生講座事業、田舎学建築学文化人類学等の学術系、アート・工芸等を結びつけた遊作の里全国フォーラムの開催を行い、遊作の里のソフト面での整備を行う。また、県、町、関係諸団体の遊作の里のハード整備に向けた提言・働きかけを行っていく。
 - ・ **事業内容：**
 - ・ **調査：ネットワーク形成**
 - 自然エネルギーと古民家を利用した事業の提案。
 - 他の古民家再生・グリーン・ツーリズム事業とのネットワークを確立する。
 - 本事業に関心を寄せる人々との結びつきを深める 機関紙の発行。
 - ・ **効果：本事業のアピールポイントをスタッフ内で共有することによって、信頼する情報に説得力をもたせることができる。外部、内部のネットワークを確立することによって情報の共有化を図ることができる。**
-
- ・ **検討：小中高向け教育旅行事業の検討：**
 - ・ **事業目的：**
 - ・ 16年、17年度の実績をもとに、18年度より修学旅行などの教育旅行を誘致し、伝統工芸体験、自然体験、農業体験を組合せた体験学習型の教育プログラムを実施する。
-
- ・ **商品開発：**
 - ・ 遊作塾等から発案される和紙等の工芸に関して商品開発を進め、事業化
 - ・ 都市からの研修参加者と共同で、今立のあるもの探しを行い、暮らしの中から発想し自然素材と工芸品をアレンジした食品の特産品、生活用品、衣服等の商品開発・販売
 - ・ **本事業の相対的な位置づけ**
 - ・ **内容：**全国で行われている古民家再生事業やグリーン・ツーリズムに関する情報を収集し本事業の位置づけをおこなう。
 - ・ **《和紙部門》**
 - ・ 和紙を用いたオブジェ、看板、街灯の商品開発・販売
 - ・ 店内または入り口に暖簾、オブジェ等の商品開発・販売
 - ・ 電車の中吊用に和紙を使用する商品サービスの開発・販売
 - ・ ファッション業界とのタイアップ（靴のデザイナー）による和紙を使った商品開発・サービスの提供

・ **《古民家+和紙(商品開発)部門》**

- ・ 枕屏風、障子、襖に貼る和紙の商品開発・販売
- ・ 照明や紙布童着の商品開発・販売

・ **《古民家再生部門》自然エネルギーを利用した商品**

- ・ 囲炉裏キット、匠が手がけた囲炉裏
- ・ 釘を使わない本棚キット、組木で作る椅子と収納箱
- ・ エコ・エネ古民家住宅教材、薪ストーブの開発
- ・ 自然エネルギー関連商品

- ・ **サミットの開催**：2005年秋に遊作の里に携わる実践家や研究者をパネリストとしたサミットを開催し、連携を深めるとともに本事業を全国に向けてアピールする。

- ・ **遊作の里 全国フォーラムの開催**：東京・いまだて物語同時開催
17年 遊作の里： 21世紀の田舎学の構築を目指して

参考資料：

事例研究

事例1 越後妻有アート・トリエンナーレ：新潟県十日町を中心とした地域活性化事業 “大地の芸術祭”

地域振興と観光振興は同じであるという広義のエコ・グリーン・ツーリズムの考え方に基づいてアートによる町づくりをしている。結果、アートだけでなく、妻有の歴史文化の見直し、自然・農業体験、地元の方達との交流、訪れる人の増加(20万人の訪問者数)をもたらしている。



事例2 ベネッセアートサイト直島：アーティスト・イン・レジデンス(芸術家を地域に招聘し、その地域でアート作品を制作する)を行い直島にある、古民家をモチーフにした作品を展示している。

Reverse Art Site Niigata

Reverse Art Site Niigata © Niigata Governor's Office 2004. All rights reserved.

家プロジェクト Art House Project

1999年に始まった、直島の町を舞台とした芸術のArt House Projectです。農村地区で古く、家屋を改造し、アーティストが家の空間そのものを作品化したプロジェクトを公開しています。ここでは、それぞれの建物、ひいてはそこで暮らされていた生活や日本の伝統、美意識に由来した空間が表現されています。

事例にある「家プロジェクト」

宮島洋男
 『Sea of Time 38(時の海 38)』1998
 『Nishima's Counter Window(フシマのカウンタウインドウ)』1998
 建築監督：山本忠司

ジェームズタレル
 『Backside of the Moon(バックサイド・オブ・ザ・ムーン)』1999
 建築設計：安藤忠雄

戸内弘
 『このことを2000』
 建築構想・基本設計：戸内弘
 基本設計協力・実施設計：木村義、永田直(アートスタジオ)
 ※現在、修復作業中のため、2008年2月末(予定)まで閉鎖します。

三浦博司
 『Aperçus de Proportion(アプロプリエーション・オブ・プロポーション)』2000
 建築設計：三浦博司
 設計協力：木村義、建築監理：アートスタジオ

「西澤」西澤 上野 義次

「西澤」西澤 山本 博司

「三浦」三浦 義典 貞川 博

「三浦」三浦 義典 貞川 博

3-2 南坂下を拠点としてハツ杉森林学習センターと連動する文化プログラム案

増田代表と共有する表現と環境の活動を同じ理念と方法論で実現する場として、子どもを対象とした子どもアートセミナーを計画し実践した。

3-2-1 子どもアートセミナー

今立の素敵な里山、森の中で、子供達が農業、食作り、炭焼き、古民家の暮し等を体験し、また、絵画、舞踊、演劇、音楽等で自由に表現をする喜びを感じてもらう合宿形式による、「いまだてフリースクール 子どもアートセミナー」を8月に開校した。

案内人は、絵描き、風車製作者、新聞記者、料理人、学者、大工、ダンサー、演出家等。活動プログラム日程及びプログラム内容

1. 創造的生活の実践プログラム 芸術を生活に取り込むことで自由な発想を育てる

創造的生活の実践とは、衣食住の色々な面でそこに芸術(創造性を開発する)を導入することでテレビなど受身文化に感化されてしまっている子どもに、自力で生きる活力をつかむ自信をつけることを目的にしたプログラム。水彩画を描いて自分の環境を考えたり、演劇表現により、自分や興味のある事柄を体と言葉を使って表現したり、ダンス表現により、自分の身体を見つめ直し体を動かす喜びを再認識したりします。

2. 素材を知るプログラム 素材を知ることで何に役立てることが出来るかを創造する

3. オリジナルデザインプログラム 自作キャラクターをビデオに取り込み動画的に使い、音楽は自作の楽器で参加

4. 世界の共食を体験する 全日程 食事を一緒にすることでこころの壁をなくす会場

複数の参加者と共に食事する。共食の描く世界について専門家から話を聞くプログラム。

第一回目プログラム

8月4日

- 9:30 集合
- 10:00 オリエンテーション
- 12:00 - 14:00 昼ごはん、後片付け
- 14:00 - 16:00 絵のプログラム
- 16:00 - 18:00 食事の準備
- 18:00 - 20:00 夕食
- 20:00 - 21:00 からおけ大会
- 21:00 - 就寝

8月5日

- 8:00 - 10:00 朝ご飯準備、朝ご飯、後片付け
- 10:00 - 12:00 蕎麦打ち教室
- 12:00 - 14:00 昼ごはん(蕎麦)
- 14:00 - 16:00 絵又は漫画のプログラム
- 16:00 - 18:00 夕方少し農作業、食事の準備
- 18:00 - 20:00 夕食
- 21:00 就寝

8月6日

- 8:00 - 10:00 朝ご飯準備、朝ご飯、後片付け
- 10:00 - 12:00 焼畑
- 12:00 - 14:00 昼ごはん
- 14:00 - 18:00 焼畑お菓子かパンか燻製作り
- 18:00 - 21:00 夕食&ラストナイトパーティ
- 21:00 就寝

8月7日

- 8:00 - 10:00 朝ご飯準備、朝ご飯、後片付け
- 10:00 - 12:00 焼畑
- 12:00 - 14:00 昼ごはん
- 14:00 - 16:00 懇談会

第二回目

10月8日

9:30 集合

10:00 オリエンテーション 担当福嶋

自己紹介(大人も子ども)自分で好きな名前をつける。予定発表。注意事項

13:00 昼ごはんの準備、昼ごはん、後片付け

13:00 - 15:00 ダンスのプログラム

15:00 - 15:30 休憩

15:30 - 17:30 楽器製作

17:30 - 19:00 夕食

19:00 - 21:00 楽器を使って演奏とダンス

21:00 - 22:00 入浴

22:00 - 就寝

10月9日

8:00 - 10:00 朝ご飯準備、朝ご飯、後片付け

10:00 - 12:00 ダンスのプログラム

14:00 - 17:00 古民家再生 大工仕事

17:00 - 18:00 農作業

18:00 - 20:00 夕食

20:00 - 21:00 入浴

21:00 就寝

10月10日

8:00 - 9:00 朝ご飯準備、朝ご飯、後片付け

9:00 - 12:00 絵と物語のプログラム(増田)

12:00 - 14:00 昼ごはん

14:00 - 17:00 地域通貨ゲーム(田中優)

18:00 - 21:00 夕食&ラストナイトパーティ

21:00 - 22:00 入浴

22:00 就寝

10月11日

8:00 - 10:00 朝ご飯準備、朝ご飯、後片付け 解散

第三回目

12月23日

- 9:30 - 10:00 集合
- 10:00 - 10:30 オリエンテーション
- 10:30 - 12:00 炭焼きワークショップ ドラム缶で炭焼きをしよう
- 12:00 - 13:00 昼食
- 13:00 - 16:00 演劇ワークショップ1 講師：中島陽典
「対話」のワークショップ まずは参加者一人一人と面接することから始めます。
- 16:00 - 18:00 クリスマス会の準備 炭焼きWS
- 18:00 - 19:00 夕食準備
- 19:00 - 20:00 夕食
- 20:00 - 21:00 ジミー栗田部 ライブセッション
- 21:00 - 22:00 入浴
- 22:00 - 就寝

12月24日

- 9:00 - 10:00 朝ご飯
- 10:00 - 11:00 人間を知る（フィールドワークプログラム）
- 11:00 - 12:00 炭取り出し
- 12:00 - 13:00 昼ごはん
- 13:00 - 16:00 演劇ワークショップ2 講師：中島陽典
- 16:00 - 18:00 クリスマス会の準備
- 18:00 - 21:00 夕食 クリスマス会 木炭ガス発生装置でツリーの点灯
- 21:00 - 22:00 入浴
- 22:00 就寝

12月25日

- 9:00 - 10:00 朝ご飯
- 10:00 - 12:00 地域を知る（地域通貨体験ゲームプログラム）
- 12:00 - 13:00 昼ごはん
- 13:00 - 16:00 ダンスのワークショップ
- 16:00 - 18:00 冬の里山探索
- 18:00 - 21:00 夕食&ラストナイトパーティ
- 21:00 - 22:00 入浴
- 22:00 就寝

12月26日

- 9:00 - 10:00 朝ご飯
- 10:00 - 12:00 もちつき 解散

平成16年度子どもアートセミナーの結果報告

1. プログラム内容について

増田が行うプログラムは子どものニーズをつかみ、アートと環境を同列で行うプログラムとして成立していた。

だが、福嶋が招聘した東京の講師のプログラムはうまくいったとはいえなかった。その理由として、今回の子ども達を集めている募集告知内容が明確に絞りきれていないため、参加した子どもがどういうモチベーションで参加しているのかをつかむのが難しかった。

各講師陣とも東京では子ども向けのワークショップを行っている人であるが、それぞれ参加者は演劇やダンス等を教わりに来ているのであって、環境やライフスタイルを含めてのプログラムに来ているわけではないから、そのすり合わせを行う準備が不足していたと考えられる。

但し、やろうとしているプログラムの趣旨は大変興味深いものであるし参加者に対しても、講師陣に対しても絞り込んだ準備をしていけば、全国にも例がない素晴らしいプログラムとなっていくと思う。

今回の講座は、地域住民に対して共同に取り組むという視点はなかったが、ゆくゆくは地域住民の方々と共同で行う事業として発展していく可能性があると思う。

具体的には、母親クラブとの共催や、今立芸術館におけるステラ座とのワークショップを検討中。

事例研究：

- ・新潟県十日町を中心とした地域活性化事業 “大地の芸術祭”

越後妻有アート・トリエンナーレ

地域振興と観光振興は同じであるという広義のエコ・グリーン・ツーリズムの考え方に基づいてアートによる町づくりをしている。結果、アートだけでなく、妻有の歴史文化の見直し、自然・農業体験、地元の方達との交流、訪れる人の増加（20万人の訪問者数）をもたらしている。

3-3 ハツ杉森林学習センターにおける利用形態の研究

ハツ杉森林学習センターは、今立住民に向けた様々なイベントの他、今立町外に向けても、大変興味深い「田舎暮らし」や森林環境に関する試みを行っている。また、今立古民家匠ロングステイPJにおいても、子どもアートセミナーにおいても全面的に協力して頂いた。

その中で今後の利用形態の提案と、問題点の提起をさせて頂く。

1. ハツ杉森林学習センターにおける問題点

様々な興味深い活動を行っているが、その活動に対してのフィードバックがないのが残念である。やはり、独自のホームページを立ち上げて、その広報とあわせて、記録やそれから派生する事項についてのフォローがされると情報センターとしての役割も生まれてくると思う。

そういった機能を立ち上げるには、資金面の問題がある。公の機関ということで経済性より公共性が重んじられる事情はあると思うが、もう少しビジネスセンスが感じられる活動が必要である。

積極的に他の団体と事業のパートナーシップを結び、事業展開を行っていく事が必要である。

また、公の施設を運営していくには規則が必要と考えられるが、ハツ杉だからできる施設運営もある。すべての団体に自由な活動を認めていくことは難しいと思うが、ハツ杉が主催者として関わる事業を増やし、その事業に関しては、ある程度自由な施設利用を認めたらどうか。そういった方法論の積み重ねが、ハツ杉の独自性をもたらしていくと考える。

参考：指定管理者制度

平成15年9月に地方自治法が改正され、公の施設の管理に指定管理者制度が導入されました。

これまで、公の施設の管理を自治体が外部に委ねる場合は、相手先が市の出資法人や公共的団体などに限られていたが、今回の指定管理者制度の導入により、市議会の議決を経て指定された民間事業者を含む幅広い団体（指定管理者）に委ねることができるようになった。

公の施設とは、地方公共団体が住民の福祉を増進するために設置し、その地方公共団体の住民が利用する施設のことで、体育施設、文化施設、社会福祉施設、観光施設など。

指定管理者が行う公の施設の管理とは、施設の設置目的に沿って行われる包括的な管理のことで、清掃、警備、保守などの個々の業務とは異なる。清掃、警備、保守などは、指定管理者制度を導入する施設については、指定管理者が直接行うか、あるいは指定管理者から他の業者に委託。市が直接管理する施設については、市が業者に委託。

八ツ杉森林学習センターも指定管理者制度を検討すべき時期に来ております。現状のスタッフの方とNPO法人等の外部の人々を合わせた新しい組織を形成し、現状の運営体制を見直すいい機会であると考えます。

観光公社

上記指定管理者制度を導入する際、観光公社等の新たな組織体の形成をすべきであると考えます。民間団体の経済性を導入して、公の援助の受け皿にも成りうる組織である必要があります。（添付：郡上八幡の観光公社についての資料）

まとめ

はじめに述べた2つの理由により今立に調査員として関わらせて頂き、半年に渡って調査、その後実践をさせて頂いたが、本年度はどれもプランニング段階で終わってしまった感が大きい。

今回、東京から友人を招いたが、「大変素敵な所である」と皆口をそろえていうが、なかなか今立町のリピーターとしての存在に代わることは難しい。

東京からは、交通費が高く、なかなか短期滞在的にリピーターとして今立を訪れることは難しいだろう。

やはり、古民家等にロングで滞在して頂き、ゆっくり時間を過ごし、ライフスタイルを見つめたりする場所として、表現活動の場所として、学会や研修等の開催場所として今立の可能性は広がっていると思う。

また、今立の独自性を出すには、長年培われてきたもの作りの伝統と豊かな自然を背景として、表現と環境を全面に出した町作り、表現を基本とした事業展開が最も可能性があると考えます。

例えば、単なる古民家の再生に終わるのではなく、もう一步踏み込んだ「エコ古民家」「アート古民家」の創出等の事業計画が必要である。

16年度の活動で、私の個人史に抵触していく部分の掘り起こしもまだまだ不十分である。

本年106歳の祖父が他界し、その葬儀の場で祖父が今立町の議長としてやられた仕事等について何人かから興味深い話を聞いたが、何か私が今立に関わらせていただいている因縁めいた所を感じ、今後も今立町に引き続き関わらせて頂きたいと思っている。